



第43回鹿児島県漁村青壮年婦人 グループ活動実績発表大会資料

平成9年1月14日

於 鹿児島市民文化ホール

会 次 第

- | | | |
|---|-----------------------------------|-------|
| 1 | 開会及び日程説明 | 12:30 |
| 2 | 活動実績発表<1人につき18分（発表13分+質疑5分）> | 12:35 |
| | (1) 野間池漁業協同組合 野間池水産青年部 峠坂 幸一 | |
| | (2) 串木野市島平漁業協同組合婦人部 永里 タエ | |
| | (3) 東町漁業協同組合青壮年部 池田 守彦 | |
| | (4) 内之浦町漁業協同組合 小型船主会 戸柱浩一郎 | |
| | (5) 種子島漁業協同組合西之表市キビナゴ生産者協議会 荒河 勝文 | |
| | (6) 宇検村漁業協同組合 青年部 山下 雅吉 | |
| 3 | 記念講演 | 14:25 |
| | 「私の魚礁論」 鹿児島大学水産学部名誉教授 肥後 伸夫 | |
| 4 | 抽選会 | 15:25 |
| 5 | 審査員結果発表 | 15:40 |
| 6 | 感謝状及び記念品授与 | 15:45 |
| 7 | 閉会のことば | 15:50 |
| 8 | 万歳三唱 | 15:55 |
| 9 | 閉会 | 16:00 |

審 査 委 員

鹿 児 島 大 学 水 産 学 部 教 授	税 所 俊 郎
鹿 児 島 県 漁 業 協 同 組 合 連 合 会 専 務 理 事	中 村 幸 雄
鹿 児 島 県 漁 業 協 同 組 合 連 合 会 専 務 理 事	柴 貞 雄
鹿 児 島 県 信 用 漁 業 協 同 組 合 連 合 会 専 務 理 事	上 田 喜 八 郎
鹿 児 島 県 林 務 水 産 部 次 長	吉 崎 勇
鹿 児 島 県 水 産 試 験 場 長	荒 牧 孝 行
鹿 児 島 県 林 務 水 産 部 林 務 水 産 課 長	諏 訪 弘 美
鹿 児 島 県 林 務 水 産 部 水 産 振 興 課 長	塩 満 暁 洋
鹿 児 島 県 農 政 部 経 営 技 術 課 生 活 改 良 専 門 技 術 員	内 野 政 子

目 次

○めざせ！ 漁業都市	1
------------------	---

野間池漁業協同組合 野間池水産青年部 峠坂 幸一

○夢をかたちに～水産加工場「しおさいの館」成功に向けて～	9
------------------------------------	---

串木野市島平漁業協同組合 婦人部 永里 タエ

○この海を子供に継がせたい～ブリ養殖にかける青壮年部長の夢とジレンマ～	15
---	----

東町漁業協同組合 青壮年部 池田 守彦

○漁師への道～2つの試験事業に取り組んで～	21
-----------------------------	----

内之浦町漁業協同組合 小型船主会 戸柱浩一郎

○キビナゴ流網漁業の経営安定に取り組んで	29
----------------------------	----

～価格の安定と資源管理に取り組んで～

種子島漁業協同組合 西之表市キビナゴ生産者協議会 荒河 勝文

○奄美の新しい漁業を目指して	36
----------------------	----

宇検村漁業協同組合 青年部 山下 雅吉

めざせ！ 漁業都市

野間池漁業協同組合 野間池水産青年部 峠坂 幸一

1 地域の概要

笠沙町は、薩摩半島の南西端に位置し（図1）、町全体が半島で東シナ海に面したリアス式海岸の連なる風光明媚な土地である。気候は比較的温暖であるものの、台風や冬の季節風を受けやすく、昭和26年にはルース台風で野間池が壊滅状態となり、救助に向かった19名の野間池消防団が犠牲になった悲しい歴史もある。

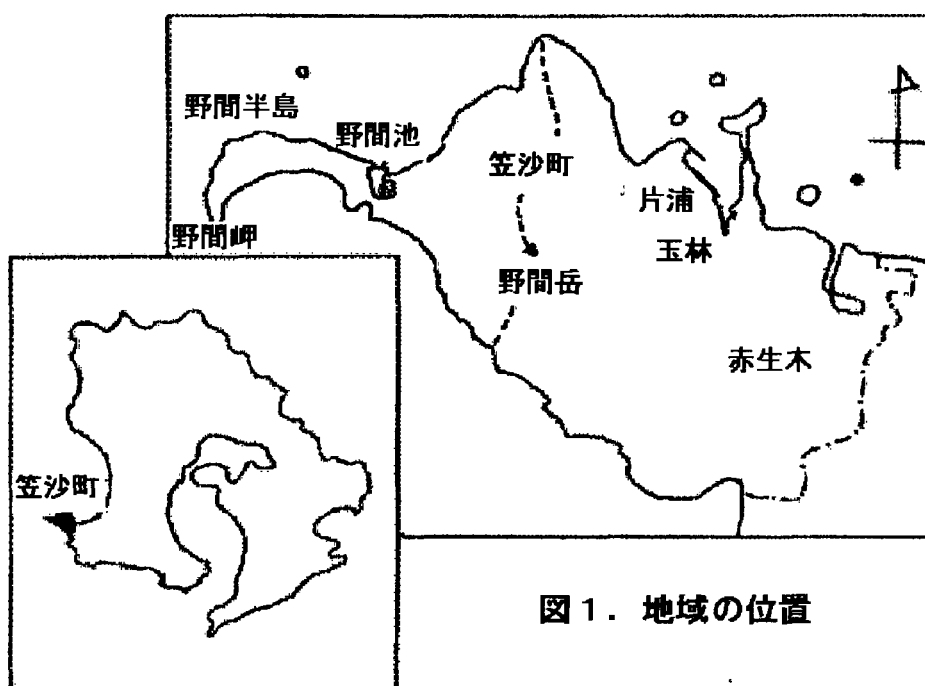


図1. 地域の位置

平成7年の人口は約4千人で、40年前の3分の1程度にまで減少している（図2）。また、その半分近くが60歳以上の高齢者で占められ（図3）、今後もその割合は増加すると予想されている。当町の基幹産業は第一次産業で、天然の良港に恵まれたこともあり、水産業は古くから盛んであった。

笠沙町の野間池地区は住民873人の小さな集落で、そのほとんどが漁業と関わりを持って
いる。池が無いのに何故野間池かという質問を度々受けるが、そういう時は島でないのに
何故鹿児島かと切り返すことにしている。昔は野間岬が一つの島で、トンボロ（砂洲）の
形成により陸続きとなり、そのトンボロに囲まれた部分が池のように見えたことより、野
間池という地名がついたと伝えられている。野間岬の高台に位置する夕日ヶ丘公園から見
おろせば、左右両方に広がる絶景に感動するとともに、野間池という地名の由来を納得で
きる。

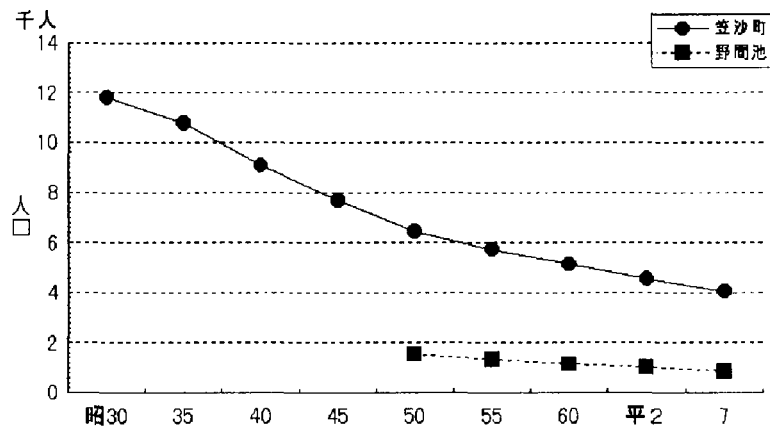


図2. 笠沙町及び野間池の人口推移

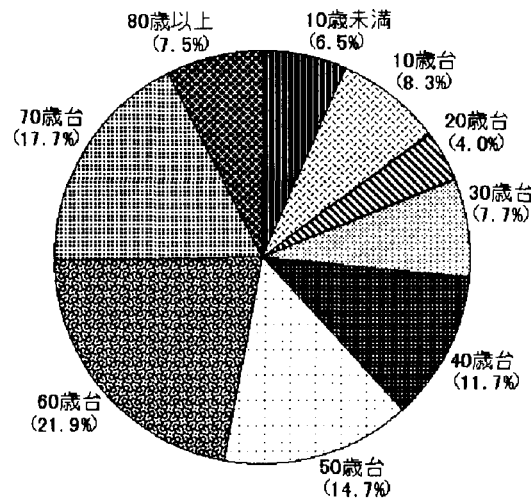


図3. 平成7年における笠沙町の年齢組成

2 漁協及び漁業の概要

笠沙町には、笠沙町漁協及び野間池漁協の2漁協があり、後者の野間池漁協には353名（正108，准245）の組合員が所属する。組合員の7割は60歳以上の高齢者で、組合員の減少と高齢化は漁協の大きな課題となっている。

当漁協では、野間岬周辺の岩礁域を中心とした漁場で、マダイ・イサキ・ブリや瀬物を対象にした一本釣り、カツオ・シビの曳縄、キビナゴ刺網、ブリ・アジ・イカや瀬物を対象にした定置網、あるいはヒゲナガエビの小型機船底曳網等が操業されている。

近年の水揚げ量及び水揚げ金額は横ばい傾向にあり、平成7年度の水揚げ量は565トン、水揚げ金額は4億1,887万円であった（図4）。そのうち水揚げ量の57%、水揚げ金額の33%は定置網漁業によるもので、次いで一本釣りやヒゲナガエビの小型機船底曳網漁業の占める割合が大きい（図5）。

平成4年度以降、組合員の所得増大のため当漁協が率先して市場流通体系の見直しを図った。特に漁獲量の減少が著しかった平成6年度以降は、漁協自ら他市場の情報収集に努め、魚を1円でも高く販売するために、隣の笠沙町漁協はもちろんのこと、鹿児島市や串木野市・枕崎市、さらに宮崎・福岡・千葉等の県外へも出荷した結果、近年の魚価低迷の中で、水揚げ金額は前年並を確保することができた。そのため、他港への水揚げが増加し自港水揚げは減少している（図6）。近年は、消費者のニーズに対応してか産地直送による形での量販店からの引合いも急増している。

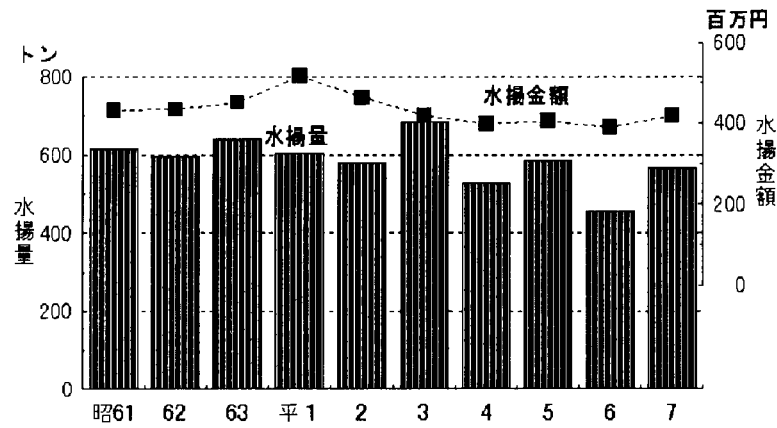


図4. 水揚量及び水揚金額の推移

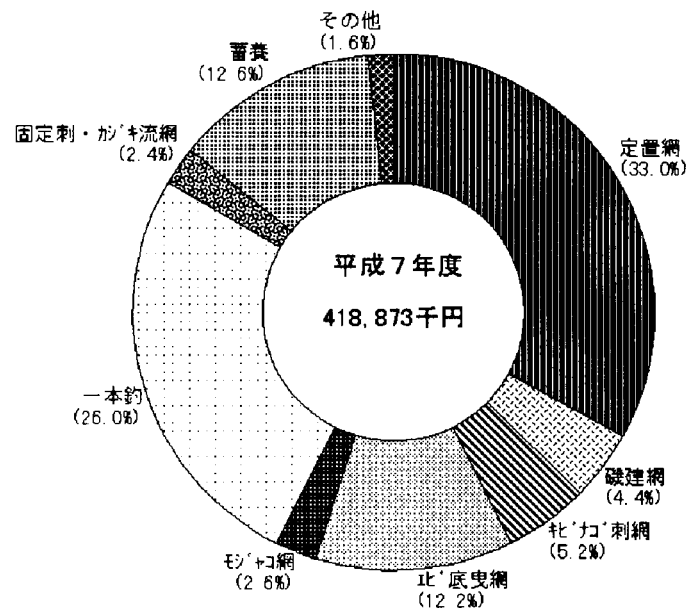


図5. 野間池漁協漁業種類別水揚金額構成

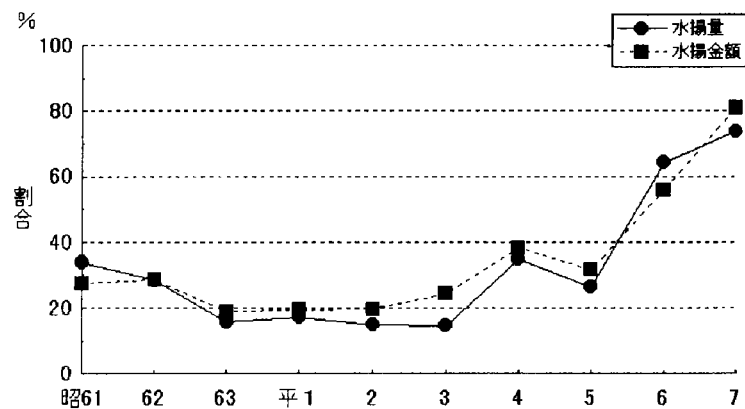


図6. 総水揚げに占める他港水揚げの割合

3 青年部の組織と活動

野間池水産青年部は、漁業生産の向上と漁村振興を積極的に推進し、豊かな漁村を建設することを目的として、昭和56年4月に漁協組合員23名で発足した。当時の会員は概ね40歳以下の青壮年で、栽培漁業の研究・実践を中心に、漁業技術・経営の研究、視察・講習会

等の開催，奉仕活動等を実施してきた。特に，アワビの稚貝放流は当初より青年部活動の中心であり，アワビの漁獲向上のため，効果調査や藻場造成・ウニ駆除等生息環境の整備も含めて，資源管理に力を入れてきた(図7)。今後もアワビの資源管理に取り組む意向であるため，アワビ種苗生産技術の向上及び稚貝の入手に御配慮くださるよう県及び関係機関に要望する。青年部では，アワビの資源管理の一環として密漁監視も交替で実施してきた。

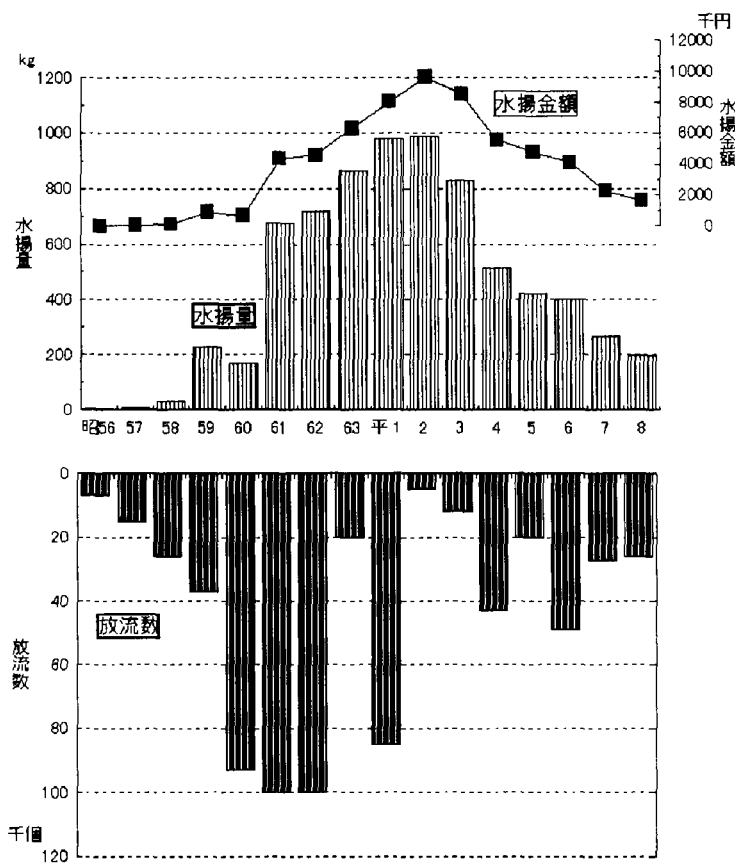


図7. 野間池漁協におけるアワビの水揚量，水揚金額及び放流数の推移

現在の青年部は8名と少人数になったものの，アワビの資源管理のほか色々なイベントへの参加にも積極的で，笠沙町のマリンランド笠沙フェスタではドラゴンボート競争に出場し，2年連続優勝という輝かしい記録を所持しており，野間池水産青年部ここにありと意気軒昂であることをアピールしたところである。

4 地域活性化に取り組んだ経緯

笠沙町は，「住む人に誇りを，訪れる人に感動を」というスローガンのもとで，第3次総合振興計画（平成7～16年度）を推進中である。このなかで特に注目されるのは野間池を主役とした観光開発，つまり沿岸漁業資料館（仮称）や「海風の楽園」構想である。これは，後継者の育成・定住を図り，漁業を中心とした産業の振興と地域住民が住やすい町づくりを目指すもので，体験漁業やクルージング等を考慮に入れた環境整備事業である。これらの構想の多くは漁業との関連が強く，具体的には野間池漁協という大きな組織すなわち私達水産青年部という若手中心の組織がイニシアティブをとり，色々なアイデアを盛り込んだ形で出来上がっている。

一方、同じ時期に鹿児島大学水産学部の学生による当地域での地域社会調査が実施されることとなった。調査内容は、野間池の自然と社会、漁業に関するアンケート、活性化の現状と展望についてである。これらの実習受入れは当青年部が中心になって行い、正規の実習以外に浜の清掃やイカ釣等の体験漁業を実施した。また、青年部と学生が一緒になって小学校の授業の中で漁業と観光について講義した。若者の少ない野間池に大学生20数名が実習に来るとそれだけで地域が活気を帯びるもので、特に女子学生は青年部一同からの大歓迎を受けた。

このように、町の「海風の楽園」構想や鹿児島大学水産学部の地域社会調査で野間池における地域活性化の気運が高まるなか、「野間池の地域興しは私達の手でやろう」というある青年部員の声をきっかけに青年部臨時総会を開き、全員一致で青年部が中心となり若いも若きも参加し未来を語り合うための地域興しに取り組むこととなった。

5 実践活動及び成果

地域活性化を進めることとなった青年部は、なにから始めれば良いか何度も話し合った。そして、まず地域を知ることが第一と考え、野間池の景勝地、観光及びプレイスポット等の情報を持ち寄って、野間池の地図に書き込もうということになった。作業を進めていくうちに、うちの裏山にこんな石碑があったとか、オレの祖先は昔大地主であったとか、山奥に水源地があるらしいぞとかいう様々な情報が続出し、結構楽しいマップづくりとなってきた。

そして、マップは手描きの方が温かみがあって良いという意見から、笠沙町の砂田学芸指導員の協力を得、カラー刷りの野間池探検マップが完成した(図8)。これには、定置網観光、クジラ・イルカウォッチング、バードウォッチング、クルージング、公園、焼酎づくり伝承展示館「杜氏の里」等の案内のほか、食堂、民宿、ガソリンスタンド、トイレ、バス停等の場所まで記載され、観光客に大変好評である。このマップがきっかけとなり、漁協では昨年度からクジラウォッチングの事業を本格的に開始した。

マップの作成で野間池を再認識できた私達は、次のステップとして鹿児島大学の貴重な地域社会調査結果を地域の方々に知ってもらい、地域活性化のためには何をすべきか話し合う場を設けたらどうかと考えた。そこで、組合長や鹿児島大学水産学部の先生方に相談したところ、想像以上に話は大きくなり、地域活性化のフォーラムを開催したらどうかということになった。つまり、大学の地域社会調査の結果報告以外に、大学教授、町長及び著名人等をパネラーとして招待し、「明日の野間池を考える」というテーマでシンポジウムを開こうというのだ。

そこで水産青年部の臨時総会で協議したところ、このようなシンポジウムが笠沙町で開催されるのは初めての試みであることもあり、部員はかなり躊躇した。ほとんど断念の決定間際、ひとりの部員から、「野間池の将来は我々水産青年部のがんばり次第である。野間池を魅力ある漁業都市にするため、フォーラムを成功させようではないか」という意見が出た。その一言が総会の結論をひっくり返すこととなった。

フォーラムの開催が決まると、大学や組合長と何度も打合せを行った。大学や組合長の御計らいにより、パネラーには、世界一周ヨットマンの迫正人さんやタウン誌「ピックアップ」編集長のたもつゆかりさんも名を連ねた(図9)。地元の人が集まるかという不安を抱えながら、数日前から会場の準備に取りかかった。

平成8年2月10日は、鹿児島地方が寒気団の張り出しにより急に冷え込み、大雪となった。山間部の道路はほとんど通行止め或はチェーン規制となり、交通網は大幅に乱れた。せっかく準備したのに中止かとかかなり気を揉んだが、パネラーの方々も無事到着でき、1時間遅れでフォーラムは始まった。

フォーラムには漁業者や地域の方々約100人が出席し、地域社会調査を実施した学生の代表3人がそれぞれ「野間池の自然と社会」、「野間池の漁業に関するアンケート」、「野

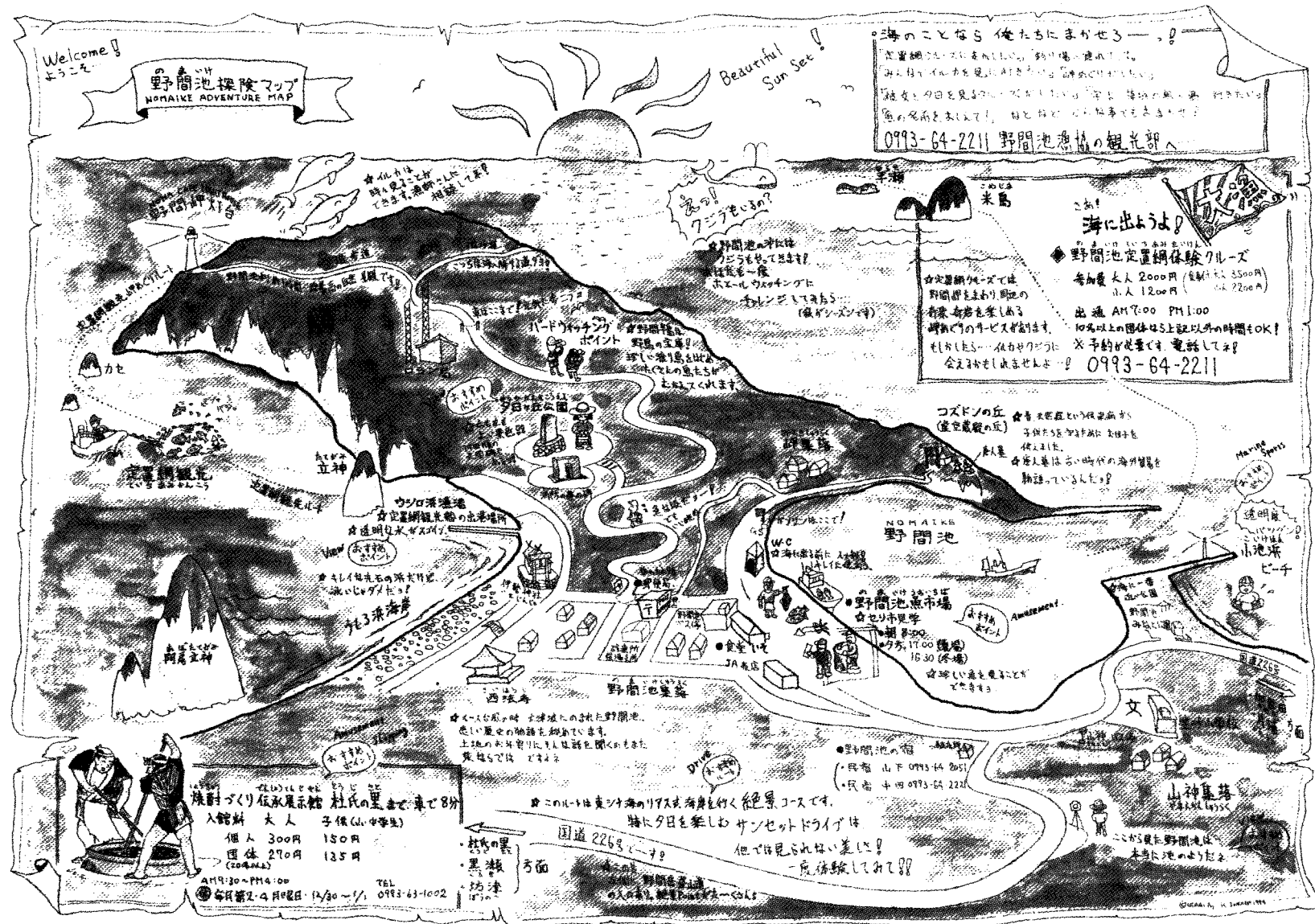


図8 野間池探検マップ

間池の活性化の現状と展望」について分析結果の報告を行った。その後、鹿児島大学水産学部の島助教授がコーディネーターを務め、パネラーと参加者の意見交換をし、フォーラムは成功裏に終わった。

フォーラムを開催した結果、野間池は道路や公園等の社会資源や若年層を中心とした人的資源には乏しいものの、魚や景観等の自然資源には恵まれ、地域住民が町づくりについて話し合う機会を多く持てば、野間池の将来は明るいという希望が見えた。また、野間池の将来について真剣に考えている人が多いので、必ずや前以上に活気のある野間池になると確信した。さらに、地域住民が楽しくて住みやすいまち、すなわち未来を語り合うまちづくりに自ら取り組むのが良いということなど、パネラーからの数々の助言は、私達青年部のやる気をも喚起し、その気になればなにごとでもできるのだという大きな自信につながった。

大学と地域の交流フォーラム	
表 題	明日の野間池を考える —地域社会調査結果をめぐって—
日 時	平成8年2月10日(土) 13:00~16:00
場 所	野間池漁業協同組合 漁民研修施設2階ホール
会次第	●開会の挨拶 野間池漁業協同組合長 宮内 叶 ●地域社会調査の結果報告 [野間池の自然と社会] 鹿児島大学学生 佐藤 直子 [野間池の「漁業」に関するアンケート分析] 鹿児島大学学生 東 敏彦 [野間池活性化の現状と展望] 鹿児島大学学生 柿元 龍太 (休憩) 笠沙小学校生徒 「笠沙太鼓」 ●シンポジウム [明日の野間池を考える] (パネラー) - 鹿児島大学 教授 市川 英雄 氏 - 鹿児島大学 助教授 山尾 政博 氏 - 笠沙町 町 長 崎向 教夫 氏 - 野間池漁業協同組合 組合長 宮内 叶 氏 - 笠沙町 学芸指導員 砂田 光紀 氏 - 世界一周ヨットマン 迫 正人 氏 - タウン誌「ピックアップ」編集長 たもつゆかり氏 (司 会) - 鹿児島大学 助教授 島 秀典 氏 ●閉会のことば 野間池漁協理事 四元 重美
主 催	野間池漁業協同組合 鹿児島大学水産学部海洋社会科学専攻

図9. 野間池の地域活性化に係るフォーラム会次第

6 波及効果

野間池に水産青年部という若手中心の組織が存在したので、笠沙町が野間池の開発に着手する大きなきっかけとなったが、その後の野間池探検マップづくりや地域活性化のフォーラム等の実績により、町の野間池活性化への取り組みはさらに本格化した。また、町内の他地域も影響を受け、隣接漁協における青壮年部や、町内の若手が地域振興について語り合う会が発足した。会の名前は、昔からこの地域は杜氏が多く、有名な初代杜氏である片平一氏の名前を拝借し「いっどん会」と命名している。

一方、マップづくりやフォーラムの開催を通して、笠沙町役場やパネラーの著名人と懇意になれたのは大きな収穫であった。特に、大学の先生方や学生と交流することにより、アカデミックな雰囲気や大学生の若い感覚に触れることができた。最近では、所用で鹿児島に行くことがあると青年部のメンバーで研究室を訪れ、学生と一緒に大学の生協で食事をするようになり、野間池の活性化についての談義に華が咲き、一層親交を深めた次第である。そういう場で聞くことのできた大学生のちょっとしたアイデアはすぐに生かされ、漁協の保冷車にクジラのマークを入れてホエールウォッチングを宣伝しているのもその一つである。

このように交流を深めることができたため、鹿児島大学水産学部の地域調査及び実習を引続き8年度も野間池で実施していただいた。8年度は地域女性に関するアンケート調査が実施され、第2回目のシンポジウムに向けて取りまとめ中である。また、野間池は外国からの留学生を受け入れる機会が多く、彼らと接することで他国の慣習や漁業を知ることができたうえ、日本及び地元の漁業を理解してもらうために勉強もしたし、今後もこのような機会づくりに向けて積極的に進めていきたい。

7 今後の課題

昭和56年の青年部設立当初は23人いた部員も、15年を経て8人に激減した。若手漁業者の減少も一つの要因と考えられるが、その最も大きい原因は、青年部でアワビの資源管理に取り組み、青年部活動の多くの時間をそのために費やしたため、本来の青年部活動の域から逸脱し、アワビだけが資源管理ではないという一部部員の批判が生ずるなどお互いの意志疎通の欠如で青年部から離脱したものも出たこと、また地域における多くのボランティア的な活動を青年部が一手に引受けたことも部員の負担となったこと等が上げられる。そこで、アワビの資源管理は青年部活動におけるひとつの事業と位置づけ、今後は青年部の設立当初の目的である漁業生産の向上と漁村振興にバランス良く、部全員で取り組める青年部として活動を進めていきたいと考えている。そうすることで、生産性の増大につながる魅力ある青年部活動が達成され、より地域の若手漁業者の参入を見込めること、さらに地域活性化活動を推進していくと地域外からの若者の漁業就業及び青年部参加も期待できるものと考えられる。

また、近年は地域活性化に取り組む機関として中心的な役割を青年部が果たしてきたが、今後、青年部だけで対応できるかという問題もある。しかし、地域活性化に取り組むための新しい組織を考慮した場合、もちろん青年部が中心となって進めることには変わらないが、青年部だけでなく女性を含めた野間池の住民を引き込んだ形での新しい組織をつくる方向で取り組んでいく必要があると考えている。

今年は野間岬に九州電力の風力発電設置も予定されており、野間池にとって更なる飛躍の年と考えられる。私達野間池水産青年部は、多くの若者の定住化が可能な環境づくりのためにも、町の自然景観に富んだ観光開発計画「海風の楽園構想」の実現化に協力しつつ、地域漁業のあり方を考慮に入れた漁業と観光という地場産業の育成を進めることにより、野間池が漁業都市として発展する日もそう遠くないうちに実現するものと確信しているところである。

夢をかたちに

— 水産加工場「しおさいの館」成功に向けて —

串木野市島平漁業協同組合婦人部 永里 タエ

1 地域及び漁業の概要

私達の住む串木野市は、本県西部に位置し、昔は金山の町として、また、遠洋マグロ漁船の基地として知られております。串木野市内には、串木野市、羽島、串木野市島平の3つの漁協があります。一番南にあります私達の島平漁協は、正組合員64名、准組合員143名で、一本釣、延縄、各種刺網、定置網等の沿岸漁業が営まれており、戦前戦後、盛んに営まれていた遠洋マグロ船も、今では9隻となっております。平成7年度の水揚量は2,703トンで、水揚金額は約32億円です。（うち沿岸漁業は、342トン、3億6千万円。）（表1、2）



図1 位置図

表1 年度別水揚量（トン）

区 分	5年度	6年度	7年度
小型定置網	41	89	55
一本釣延縄他	296	297	287
小 計	337	386	342
遠洋マグロ	2,930	2,233	2,361
合 計	3,267	2,619	2,703

表2 年度別水揚高（百万円）

区 分	5年度	6年度	7年度
小型定置網	24	20	19
一本釣延縄他	373	342	340
小 計	397	362	359
遠洋マグロ	4,473	2,662	2,835
合 計	4,870	3,024	3,194

注：資料は漁協業務報告書、年度は6月1日から5月31日まで

2 組織の概況と運営

私達漁協婦人部は、昭和34年に発足し、現在の部員数は80名で、部長1名、副部長2名、監事2名という役員構成となっております。

婦人部の中に、昭和49年に生活改善グループ「まさごグループ」を結成し、生活改善グループ員を中心に地道な活動を続けておりますが、近年婦人部員の年齢も年を追うごとに高齢化してまいりました。

この様な状況の中、主な活動は串木野市生活改善グループ連絡会を通じて、「海の幸山の幸」機関誌を発刊したり、「海の幸山の幸」講座を実施しております。農漁家の地域産物を活用し、中でも「海の幸」講座では魚食普及に力を入れ、農家グループとの交流の場も盛んで、グループ員の方々には好評を頂いております。

なお、その他の活動は残念ながらあまり活発ではありません。

3 活動の動機

私達は、日頃からどうにかして地域水産物を利用した水産加工を通じて、地域の活性

化を図りたいと念じ続けてまいりました。

そこで、「まさごグループ」では、昭和５６年頃から水産普及所の指導を得て、塩蔵ワカメ加工を、さらに昭和５８年頃からは地元で捕れる深海エビの値段の安い小型のエビを使って、味付けして炭火で焼き上げた「エビスナック」を作ってまいりました。その頃から管内１市５町の生活改善グループ連絡会事業で取り組んでおります農水産加工品等の詰め合わせ宅配セットの中に、夏の便は塩蔵ワカメ、冬の便にはエビスナックを入れて頂き、会員の皆様においしいと喜ばれておりましたが、特に加工の施設があるわけでもなく、部員の自宅の片隅で時期的に加工するのがせいっぱいでした。その頃から部員の間でも、自分達の加工場がほしいと言う意見が出ていましたが、エビ、ワカメ以外には具体的な加工の計画もなく、断ち切れ状態になっておりました。

そんな折り、平成３年度に漁協経営の安定を図るため、漁協自営の小型定置が設置されました。最初はサゴシ等が捕れ順調でしたが、近年、小型のタチウオやソウダカツオ、コノシロ等が大漁にもかかわらず、価格が安く（表３）、漁協はもちろん、私達婦人部ももったいない、何とか出来ないかと集まる度に話題となりました。

そこで、「まさごグループ」が持っている経験と加工技術を取り入れて、未利用魚・低価格魚を加工して付加価値を高め、自営定置の経営安定と婦人部の活性化を図るため、婦人部の加工場を建設しようという気運が高まってまいりました。

表３ 平成７年度自営定置魚種別水揚量（H7.6.1～H8.5.31）

魚 種 名	数 量 (kg)	金 額 (千円)	平均単価 (円/kg)
ヒ ラ メ	570	2,073	3,638
サ ゴ シ	299	1,025	3,429
タ イ	131	253	1,938
カ マ ス	1,774	2,082	1,174
ス ズ キ	455	428	941
イ カ 類	3,318	2,545	767
ウ マ ズ ラ	751	519	691
ブ リ	4,368	2,462	563
キントキダイ	1,224	676	553
ア ジ 類	6,046	1,860	308
ト ビ ウ オ	3,801	665	175
タ チ ウ オ	17,898	1,930	108
そ の 他	14,027	2,483	177
計	54,659	19,002	

注：資料は漁協業務報告書

４ 実践活動の状況

何度となく計画が盛り上がっては消えていく中、婦人部の熱意に負けて、漁協、市役所も加工場建設に向けて動いてくださいました。そうした関係者の努力により平成６年度に漁協の近くに農水産加工施設が２ヶ年事業として着工する運びになりました。加工

場を建設するに当たり、実際には何の魚をどのように加工して行くのか。また、そういった加工技術を誰が持っているのか。さらには、作った製品はどのようにして販売していくのか等色々な問題が出てまいりました。

その度に、漁協、市役所、農水産普及所、婦人部員が集まって協議を重ねました。そんな中、「本当に私達に出来るのだろうか」と言う不安がよぎりましたが、「まさごグループ」で培った知識と技術と情熱があれば大丈夫とみんなで前向きに取り組みました。平成7年12月17日にオープンしました加工場建設までの経緯は、昨年の発表大会の寸劇でも披露しましたが、加工施設の名称は婦人部員の投票で「しおさいの館」と命名しました。自分達の働く施設ということで堅苦しい名称は避け、親しみのある名前だと自慢しております。

さて、肝心の加工についてですが、施設の建設に平行しながら各種研修会、視察を実施し、県水産試験場や農水産普及所、あらゆる方々のご指導のもと、試作品の作製や食品衛生、営業許可取得等の研修を実施しました(表4、5)。これらも、長年生活改善活動で学習や技術を習得させて頂いたおかげと深く感謝いたしております。

表4 加工試作及び研修会並びに試験販売活動実績

平成7年度	
・ 4月20日(木)	加工基礎研修会開催(県単コンサルで実施)
・ 11月10日(金)	加工研修会開催(農改主催)
・ 11月15日(水)	カツオ味噌試作(冠岳山市用)
・ 11月23日(木)	冠岳山市試食販売
・ 11月29日(水)	カツオ味噌、タチウオ味噌干試作(しおさいの館開店用)
・ ~30日(木)	
・ 12月1日(水)	加工スタッフ会議(農改主催)
・ 12月4日(月)	保健所検査
・ 12月5日(火)	カツオ味噌製造、他商品製造
・ 12月7日(木)	加工スタッフ会議
・ 12月17日(日)	「しおさいの館」オープン
・ 1月29日(月)	県特産品協会主催「かごしまの味フェア」出品、販売
・ ~2月10日(土)	
・ 3月24日(日)	串木野お魚まつりでの販売
平成8年度	
・ 7月17日	漁協総会記念品用セット
・ 8月	お中元用にセットものの販売、管内生活改善古里便セット
・ 10月22日(火)	農山漁村女性起業加工食品コンクール(菓子部門優秀賞)
・ 10月27日(日)	串木野「港まつり」での販売
・ 11月9日(土)	県主催「農林水産まつり」販売
・ ~10日(日)	
・ 11月11日(月)	県特産品協会主催「ごはんの友フェア」出品、販売
・ ~21日(木)	
・ 11月22日(金)	第30回県水産物品評会(水産庁長官賞)
・ 11月23日(土)	冠岳山市販売
・ 12月	お歳暮用にセットものの販売、管内生活改善古里便セット

表5 研修視察

日	時	研 修 先
平成6年 3月30日(水) ~31日(木)		熊本県津奈木漁協
平成7年 3月17日(金)		笠沙町野間池漁協加工施設

最初の加工の対象は、漁協自営で大量に捕れて価格の安いソウダカツオ（メチカ）と小型のタチウオをどうにか加工しようということになりました。水産試験場から助言を頂き、メチカは当初は味噌漬けに加工しましたが、その後部員同士で話し合い、カツオ味噌を試作し、好評だったことから、名称も「こりやうんまか」として生産を始めました。タチウオはみりん干しが良いだろうと、試作を繰り返しました。製品を作っては漁協職員や地域の方々に味見をして頂いたり、みんなで意見を出し合って作製しました。同時にパッケージや包装についても検討いたしました。現在では、他にワカメの茎を使った佃煮やタチウオの中骨を使った骨せんべい「やせがまん」等も好評を頂いております。

次に、販売についてですが、加工場内に小さな売店を併設し、漁協の窓口と両方で販売しておりますが、場所が国道から入り込んでいますので直接販売は余り見込めないことから、地元の水産祭や産業祭のような機会に出かけて販売しております。その他、特産品協会主催のフェアや品評会にも積極的に出品し、高い評価を頂き部員ともども喜んでおります。

施設の運営につきましては、計画当初からどの様なやり方が良いのか色々な意見がありましたが、結局、漁協直営事業として、漁協婦人部を賃金で雇って運営する方法に決まりました。婦人部員からやる気のある有志に集まって頂き、現在は7名で日曜を除き毎日加工を実施しております。運営に関しては漁協の直営事業でございますが、これも一つの女性起業であると自信と誇りを持って毎日加工に励んでおります。

約1年間の収支では、売上高760万円、総支出740万円で、初年度投資があった割には、黒字が若干出て、関係者一同ほっとしているところです。（表6）

表6 「しおさいの館」収支（平成7年11月から平成8年10月まで）

収 入		支 出	
カツオ味噌	919,996円	加工原材料費	2,944,583円
カツオ角煮	722,133	加工労務費	3,516,780
タチウオ味噌干し	1,824,130	加工経費	952,153
さかなのふりかけ	410,970	電気、水道、ガス	
ワカメ茎佃煮	1,010,945	修繕、宣伝代他	
その他	2,717,035	合 計	7,413,516円
合 計	7,605,209円	差 引	191,693円の黒字

表7 加工品リスト

商 品 名	原 料 等
カツオ味噌「こりゃうんまか」	ソウダカツオ
カツオ角煮「しおさいのタベ」	ソウダカツオ
手作り太刀みりん	タチウオ
やせがまん（骨せんべい）	タチウオの中骨
さかなのふりかけ	ワカメ，エビくず，タチウオ中骨他
ワカメ茎のつくだに	ワカメ
エビスナック	深海エビ

※その他に、味噌、めんつゆ、だし汁等も加工している。

5 活動の成果

水産物加工を始めるに当たっては、加工場運営の方法の検討や加工品の種類、販売方法等の検討とかなりの問題が山積みされておりましたが、水産試験場、農・水産普及所や漁協担当者の協力により加工製品の試作、販売までこぎつけることが出来ました。

事業に先だって加工に対する基礎的な研修会を県単コンサル事業において実施しましたが、その際は漁協婦人部8名が出席し熱心に研修し、その後常時5～7名前後が加工に従事している状況であります。なかでも漁協の担当職員さんが色々と面倒を見てくれておりますが、その配下で私達婦人部員は一人一役と役割を分担し、経理担当、1日の商品の出庫管理と現金の照合、生産高票、原価計算の割出し、在庫管理、資材管理、労務担当、衛生管理等自分達で積極的に取り組み、月末には棚卸しするなどキメ細やかにチェックするのも私達婦人部員の役目です。

最初に試作したカツオ味噌やタチウオ味噌干しにつきましたは、味について「甘い」「辛い」等色々な注文がでましたが、基本的にはまずまずの評価でありました。その後、試作を数回繰り返して、「かごしまの味フェア」などでも良い評価を頂き、婦人部員も自信を持ちました。それに加えて、加工種類を増やし、その中からワカメの茎の佃煮等は品切れになるようなヒット商品になりました。ヒット商品は、マスコミ等でも取り上げられ、ちょっとした話題にもなりました。

また、今年度の第30回水産物品評会で水産庁長官賞、農山漁村女性起業加工食品コンクール菓子部門で優秀賞を頂き、部員、漁協ともども大喜びしているところです。このような新製品の開発につきましたは、水産試験場、農水産普及所等の助言、協力はもとより、婦人部員の日頃からの加工に対する熱意が大いに寄与していると思っております。

さらに、加工場オープン以来、県内、県外からの視察も多く（表8）、色々な人達と意見交換が出来て、それらの意見交換の中から自分達の加工の改良や新製品のヒントを学び取って勉強しているところです。また、イベント等で直接消費者と接する機会も多くなり、自分達の水産物の良さをPRすると共に、消費者から色々な意見や苦情も聞くことができ、それらの意見も今後の活動に生かしていきたいと考えております。

一方では、婦人部の集まり場所ができ、浜に活気が出てきています。浜に揚がる魚や天気にも今まで以上に関心が高まり、チームワークも強まってきております。

表8 視察受入

日	時	視 察 者
平成7年11月	8日(水)	加世田, 笠沙, 野間池漁協婦人部
平成8年	2月8日(木)	内之浦町漁業振興推進協議会
	2月9日(金)	串木野市生活改善グループ
平成8年	2月16日(金)	里村漁協婦人部
	2月26日(月)	志布志漁協婦人部
	3月15日(金)	伊集院地区生活改善協力員
	4月10日(水)	江口漁協加工部
	10月15日(火)	熊本県大矢野町漁協婦人部
	11月7日(木)	串木野市商工会婦人部
	12月10日(火)	上屋久町漁協婦人部

6 今後の計画・問題点

婦人部で作った自前の加工品で、漁協総会記念品、お中元やお歳暮のセットものがよくやく販売出来るようになりましたが、いくつかの問題も残っております。

その大きな問題の一つは原料不足であります。2年前まで大量に捕れていたタチウオやメチカが自営の定置に全然入らず、甌島や他漁協から取り寄せたりしましたが、製品加工が出来ない状況ができてしまいました。また、ワカメの茎も品不足で天草から取り寄せたり原料確保に苦労している状況です。

また、婦人部員が高齢のため、あまり過度の作業を続けると体調を崩す心配があり、原料確保と加工時期をうまく組み合わせ、作業にあまり無理のこない体制を考える必要があるようです。今後、後続く若い後継者が仲間に加わって、ますます賑やかになってくることを期待しています。

さらに、販売につきましても、まだまだ多くの問題をかかえており、早急な販売ルートを構築することが重要となってきております。その際は、今までのような地元イベント中心の販売はもとより、鹿児島市内での販売拠点の開発と充実も必要であると思われます。

しかしながら、婦人部の永年の夢であった「しおさいの館」は、私達婦人部の心のよりどころです。原料を確実に確保し、更に研鑽に研鑽を重ね、安定的な品質で、安定的な生産が出来るよう漁協と一体となって、取り組んで行きたいと思っています。所期の目的であります地域特産的な水産物加工品の開発や付加価値向上のため、また、婦人部の働く場所ができ、婦人部活動の活性化にますます役立つことを確信いたしております。

最後になりましたが、この場を借りまして、お世話になった関係者の方々に厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

この海を子供に継がせたい — ブリ養殖に懸ける青壮年部長の夢とジレンマ —

東町漁業協同組合青壮年部 池田守彦

1 地域と漁業の概要

東町は鹿児島県の最北端、熊本県との県境に位置し、長島本島、諸浦島、獅子島など大小22の島々からなっている。(図1)

約100キロに及ぶ海岸線は変化に富み、ブリを主体とした魚類養殖業、ヒトエグサ養殖業や一本釣り・吾智網・旋網等の漁船漁業が営まれている。

東町漁協は正組合員515名、准組合員210名、計725名の組合員からなり、販売事業の取扱高は約100億円に達し、このうち82%がブリ養殖業である。(図2)

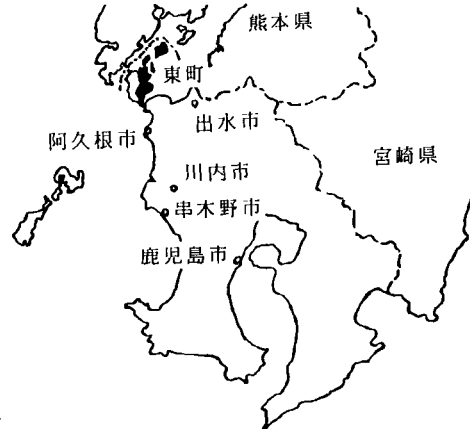
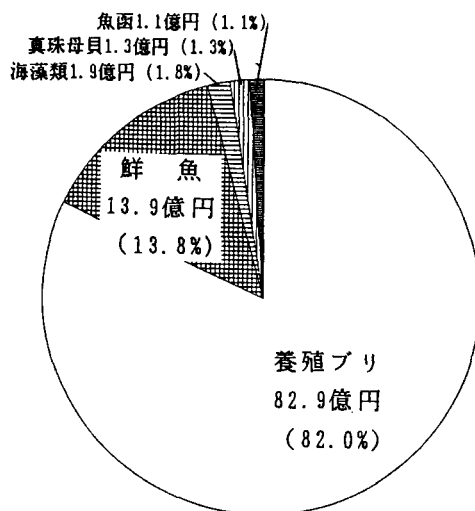


図1 位置図

平成7年度販売事業取扱高：101.1億円



受託販売取扱高推移

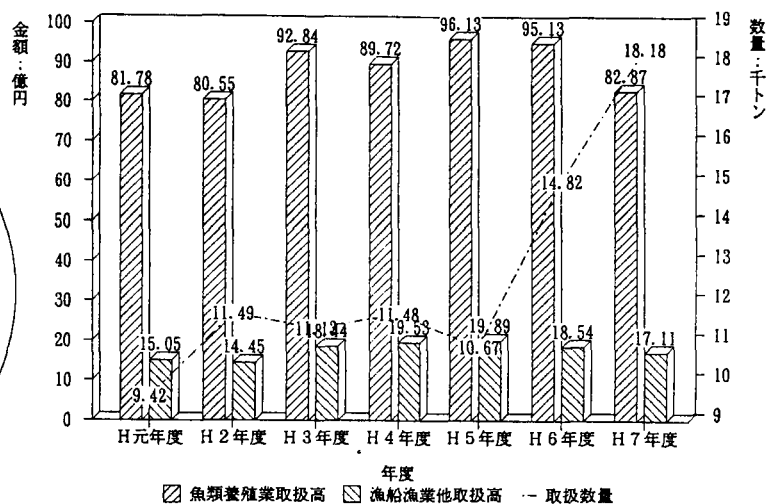


図2 平成7年度販売事業取扱高及び受託販売取扱高推移

ブリ養殖業は、昭和42年に小割式養殖業が導入され、昭和49年には黒之瀬戸大橋の開通による運送の合理化で飛躍的に成長した。現在では、消費者ニーズに合った周年出荷体制の確立により、(東)ブランドとして全国的に知られている。

最近の魚類養殖の現状を見ると、昨年、一昨年と生産過剰による価格の暴落、餌料魚種の水揚げ減少による餌料価格の高騰、魚病によるへい死、景気の低迷等、養殖業を取り巻く環境は非常に厳しい状況にある。昨年の春頃からは、価格の回復、餌料の値下げ傾向と少し明るい兆しもあったが、病原性大腸菌O-157の影響を受け生ものの消費が伸び悩み、特に一番のブリ消費地である関西地方は一昨年の阪神大震災に続く大打撃で、一向に景気の上向く気配がうかがえない。

私達魚類養殖業者が、ここ2、3年の厳しい状況を乗り越えることができたのは、協

同組合という組織の力によるところが大きい。東町漁協ではまず第一に、共同販売により(東)ブランドを確立し、他地区より有利に販売を進めてきた。さらに、自営加工場によるフィレーの販売により、漁業者の所得向上と安定を図ってきた。また、餌料の購入に関しては、全国各地より安く良質の餌料を購入している他、一昨年は漁協単独でノルウェーからニシン等を輸入するなど、生き残りをかけ様々な取り組みを続けてきている。町では、基幹産業である水産業に対し水産対策委員会を設置するとともに、餌料資金に対する利子補給を実施した。

2 青壮年部活動

(1) 青壮年部の概要

東町漁協青壮年部は、漁業振興、漁村の活性化のために若い力を結集すべく、40才未満の有志が昭和54年に各浦浜の青年団を統合して発足した。現在は12地区125名の部員からなる。活動としては、青壮年部の日スポーツ大会や町産業祭におけるハマチ品評会、婦人部と合同による海岸クリーンアップ運動、その他各種イベントへの参加、放流事業への協力、研修会等を実施している。(表1)

後継者は養殖業、漁船漁業を問わず確保されており、毎年、5～9名の新規就業者を迎え、青壮年部では、総会時に激励会も実施している。

(2) 部長になって思うこと

私は、一昨年まで部長補佐を務めていたが、昨年4月に部長となった。役員改選で部長に推薦された時には、これまでの歴代部長の活躍や実績を知っているだけに、私には荷が重すぎた。長時間かけ協議した結果、前部長の強い要請により引き受けることとなったが、まだ、私の中には迷いが残っていた。この役員改選の話し合いのあった翌日、まだ総会前で正式に引き継ぎがされていないにも関わらず、前部長が突然の事故で死去された。一番大事な兄貴を亡くしてしまい、私の気持ちは落ち込み、不安でいっぱいであった。支部役員の一人在、

「守彦さんが部長を引き受けてくれたからには、オイももう一期支部役員をして協力すっ！一緒に頑張ろう！」と言ってくれた。この言葉を聞いたとき、青壮年部活動に一番大事なことはチームワークだと痛感した。そして、やるからには精一杯頑張ろうと決意した。



(3) 「青壮年部の日」の活動

私達の青壮年部活動は、仲間づくりの場であり情報交換の場であることから、平成5年、毎年11月の第一日曜日を「青壮年部の日」と定めた。その後現在まで、ソフトボールやミニバレーを各支部対抗で実施し、部員間の交流を図っている。

さらに、競技終了後の抽選会も楽しみの一つである。抽選会で頭を痛めたのは、特賞のさらに上の「部長賞」の賞品である。これは部長の手出しで豪華なものを準備しなければならない。また、その他の賞品は、いろんな方面から手配し空くじなしを目指したが、これは悪評となった。「空くじがあるからスリルが味わえるのだ！」との部員の声。なるほどギャンブラーとはそんなものかと感じたところだ。ともかく80名近い参加を得、おいに盛り上がりほったした。

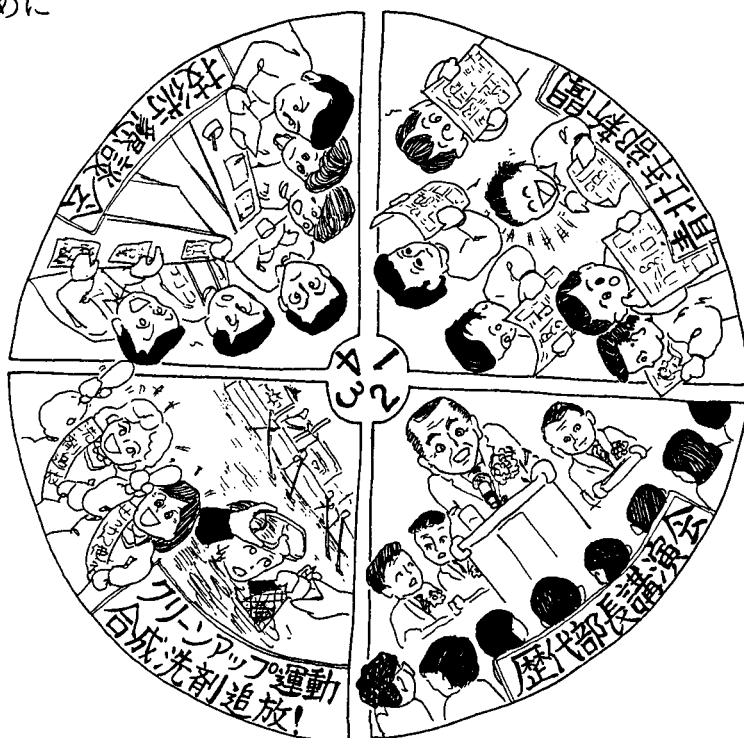
(4) 魅力ある青壮年部にするために

①青壮年部新聞の発刊：地域の情報や個々の部員の考えを載せ、部員間の情報交換の場としたい。

②歴代部長表彰と講演会：今の青壮年部があるのは歴代の部長の頑張りである。そこで、感謝状を贈り、部長としての苦労話等を聞き、これからの活動の礎としたい。

③漁協役職員・婦人部との懇談会：青壮年部の部員が考えていることを漁協役職員に理解してもらいたい。婦人部との交流を深め、お互い更に協力していきたい。

④技術懇談会：部員の体験したことを発表してもらい、より高度な技術を追求するほか、失敗談から何に問題があったかを語り合い、毎日の仕事という身近な話題で懇談したい。



3 プリ養殖の問題点

(1) イリドウイルス感染症（平成7年プリ養殖日記より）（図3）

5/10：モジャコ導入。例年どおり。

7/ 9：類結節症発生。アンピシリン投薬。

（3～4日投薬すればすぐに治まる。2～3日様子を見るとまた死に出す。）

7/30：アンピシリン投薬5日目。へい死が減らない。腹を割っても類結特有の白点がなく、脾臓が異常に大きい。体色が黒くなって目だけキラキラ光り、ボヤボヤ泳いでいる。漁協の魚病検査室に持って行くと、イリドウイルスと診断された。初めて見る病気だ。

8/ 1：「餌にアミエビを混ぜると良い」と聞いたので、今までのEP飼料をやめ、シングルモイストにアミを半分混ぜた。「ビタミンE・Cが良い」という話も聞いたので栄養剤も3～4%入れる。

（毎日50～100尾のへい死）

8/ 5：へい死は全く減らない。取り揚げが辛い。シングルモイストとアミはあきらめ、アジのモイストにし、栄養剤も6%に増やした。

8/ 7：類結が併発。アンピシリンを投薬。

8/11：類結は治まったが、イリドは相変わらずダラダラと続く。

8/16：「どげんもでけんたっで、ほっていつちよけ」と言われた。そうだと思い、餌止めする。

8/20：かえって類結が増えてきた。餌止めも効果なし。投薬をする。

8/26：「選別や網替えは良くない」と聞いていたが、生簀の汚れとハダムシが気にな

り、淡水浴をし、網替えをする。イリドの他に連鎖球菌症が増えたように見える。「抗生物質はイリドに全く効かないどころか逆効果だ」と聞いていたので連鎖の投薬はあきらめる。

8/28: 突然1,500尾ものへい死。ほとんどが連鎖だ。一昨日の決意は撤回して、急ぎよ投薬する。

9/ 1: 連鎖はほとんど治まったが、200尾のへい死。イリドのボヤボヤだけが目立つ。

9/18: 今朝は少し冷えた。水温は24度に下がる。心なしかボヤボヤも少なくなり、餌も食べるようになった。

9/25: 初めてへい死ゼロ。目の前が明るくなった。しかし、歩留まりが30%を下回っていることを考えると来年からのモジャコ飼育に大きな課題を残す。

平成8年は、前年の苦い経験を生かして、餌付け時点より、栄養強化等に努めた結果、イリドの発生はあったが、発病期間は短く、へい死数も少なく、歩留まりは80%であった。

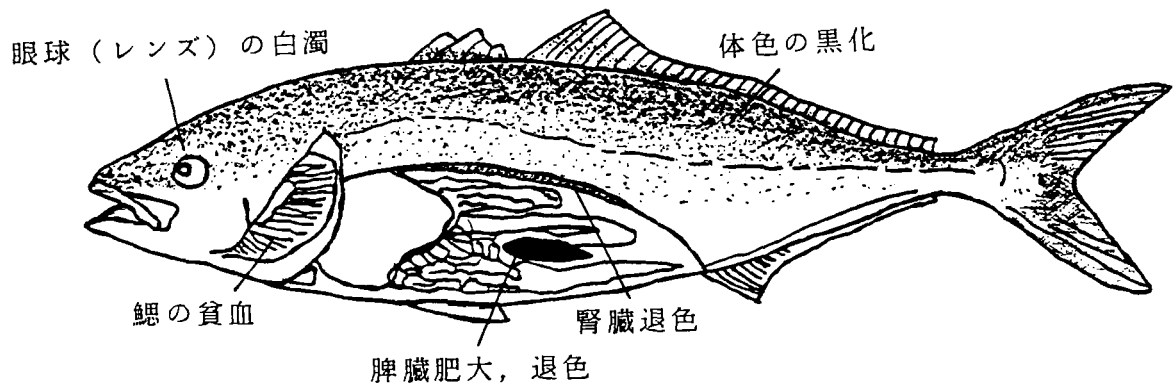


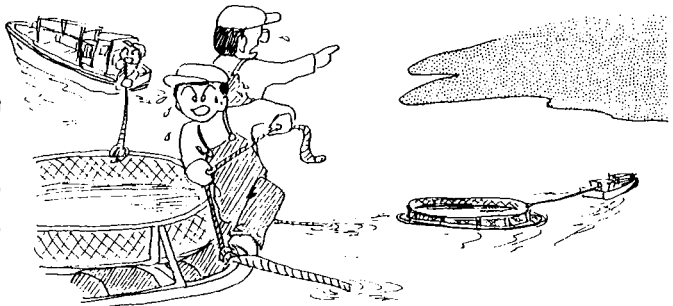
図3 イリドウイルス感染症の症状

(2) 赤潮

赤潮は一度発生すると最悪の場合、全滅に追い込まれる。私達の漁場である獅子島の幣串地区は、過去何度か被害にあっている。特に平成元年の赤潮の発生では、幣串地区だけでなく、町全体に被害が広がり、その被害総額は1億円と聞いている。このため赤潮の発生頻度の高い、幣串地区や福浦・脇崎地区では、3年ものは持たずに、2年もので勝負している。

赤潮が発生すると、地区の有線放送で知らせがある。それから、漁場に着くと船尾に生簀を結び付け、プロペラにより攪拌を行い、粘土を撒き、さらに安全な場所に生簀を移動するなどしてその場を一時的にしおいでいる。

ある友人の話では、「赤潮が押し寄せて来ると、醤油色の潮が生簀の半分まで来た時点で、魚は逆の半分側に寄り、逃げ場を失い、バシャバシャと飛び跳ね、海が沸騰したような状態になる。それが、生簀全部を覆った時・・・、何事もなかったかのように静かになり、見る間に（死んだ魚の重みで）生簀が30センチほど沈んだ!」と言う。その時彼は生簀の上でヘタリ込んだという。私は幸いこのような経験はないが、いつ思い出しても背すじが凍る思いになる。



(3) 漁場環境

これまで述べたような、魚病や赤潮の発生の原因の一つに漁場環境の悪化が関連している。

幣串地区では、町内でもいち早く適正養殖の為の放養量の規制に踏み切った。昭和63年、34業者から成る地区の養殖業者会において、環境悪化の防止や生産コストの削減等を考え、成魚の最大放養尾数を取り決め、計数の際は他の業者が立ち合うことにした。最初の頃は少し抵抗もあったが、魚体の大きくなり方や魚病に対する抵抗力など、目に見える効果がでていた。

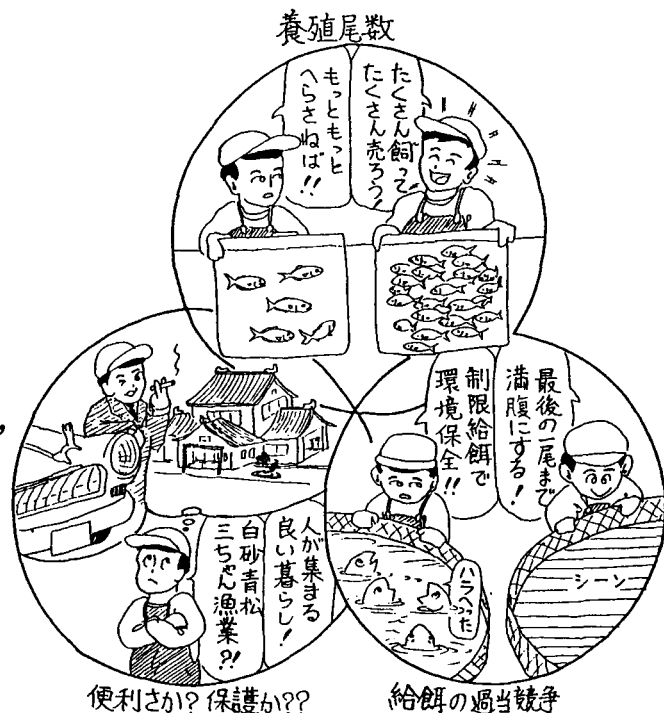
4 夢とジレンマ

(1) ジレンマ

①放養量は適当か? : 幣串地区で実践している適正養殖のための放養量の取り決めは、東町漁協全体で取り組む方向にある。経営面や各漁場の環境等いろいろな条件も考えなければならないが、放養尾数をもっと減らすことで良質で低コストの魚づくりができるのではないか。

②給餌方法は適当か? : 私自身、子や孫の代までこの漁場環境を守り、養殖業をしてもらいたいと思っている。その反面、実際は出荷前になると、最後の1尾まで餌が行き渡るように十分な餌を与え、漁場に負荷をかけている。経営者であればきれいごとだけでは済まされない部分もある。

③環境と開発 : 今は、海岸のすぐ近くまで住宅が建ち、コンクリートの防波堤により作業場も広がった。一昔前私が養殖を始めた頃は、もっと海は青く、透き通っていた。砂浜もたくさんあり、どこでも泳げた。開発が進み、便利になることは有り難いが、無造作に自然環境が失われるのは問題である。



(2) 夢を現実に

私の夢は、子供達にも漁業を喜んで継いでもらうことである。

これからは、餌となる魚種の水揚げも期待できず、生餌価格は安くなるとは思えない。また、ブリも生産過剰になれば、昨年、一昨年の二の舞を踏む。作れば売れるという時代ではないことは養殖業者であればわかっていることだ。いかにして低コストで良質の魚を作るかが課題である。そこで薄飼いによる適正養殖を行政や漁協から指導されるのではなく、業者自身の手で確立していかななくてはならない。

漁場環境の問題は、海を使用する人間として、業者それぞれが意識を高めていかななくてはならない。私達は同じ海を使わせてもらっているのだから、海に対してもっと謙虚で感謝しなければならない。規制緩和の叫ばれる昨今であるが、環境問題は陸で

も海でも地球レベルで注目されており、規制は強化される方向にある。漁場環境の問題は個々の力では、どうすることもできない。地域ごとの組織の力で解決されるものだと思う。青壮年部は、時代の流れに敏感で、新しいことをスムーズに取り入れ実践できる集団だ。私達は「漁業後継者」と呼ばれているが、さらにその後継者の時代も考え、これからの青壮年部活動、魚類養殖業を実践し、夢を現実のものにしたい。

(参考)

表1 平成8年度 青壮年部活動実績及び計画

月 日	活 動 内 容	場 所
4/ 9	漁青連通常総会	鹿児島
4/11	新漁業後継者激励会及び青壮年部通常総会	東 町
4/27	イカシバ投入 (脇崎地区)	東 町
5/20	ヒラメ放流 (伊唐, 脇崎地区)	東 町
6/ 3	イカシバ投入 (葛輪, 幣串地区)	東 町
6/ 7	ヒラメ放流 (薄井, 宮之浦地区)	鹿児島
6/12	漁青連役員会	鹿児島
6/15	イカシバ投入 (三船, 本浦地区)	東 町
7/ 9~12	基礎講座	鹿児島
7/10	役員会	東 町
7/12	マダイ放流 (町内全域)	東 町
7/20	「海の記念日」海岸クリーンアップ運動	東 町
7/27	イカシバ追跡調査	東 町
8/18	「水産の日」会場準備	東 町
8/19	「水産の日」行事参加	東 町
9/13	漁青連研修会 (漁婦連合同)	鹿児島
9/24	役員会	東 町
10/ 4	中学校水産教室協力 (鷹巣中学校)	東 町
10/11	役員会	東 町
10/26	北薩地区ソフトボール大会	阿久根
11/ 3	「青壮年部の日」スポーツ大会	東 町
11/13	役員会	東 町
12/ 7	町産業祭ハマチ品評会	東 町
12/ 8	町産業祭行事参加	東 町
1/14	水産振興大会及び実績発表大会	鹿児島
2/	役員会	東 町
2/	先進地視察研修	北海道
3/	役員会	東 町

漁師への道～（2つの試験事業に取り組んで）

内之浦町漁業協同組合小型船主会 戸柱 浩一郎

1 地域と漁業の概要（図1，2）

私の住んでいる内之浦町は、大隅半島の南東部に位置し、町の背後には、山脈が連なる平地の少ないところで、町の北東部には内之浦湾を有し、黒潮の寄せる太平洋に面している典型的な漁業のまちである。

また、昭和37年には、東京大学の宇宙科学研究所が完成し、昭和43年には、このロケット基地から日本初の人工衛星「おおすみ」が打ち上げられるなどロケットのまちとしても知られている。

内之浦町漁協は、正組合員185名、准組合員21名の計206名からなり、平成7年度の水揚げ高は約25億円である。主な漁業は、定置網漁業、魚類養殖業、旋網漁業である。

昭和20年代後半ころには、ブリの大漁で、その名も全国に知られるほどの盛況であったが、近年は、厳しい漁業情勢の中、苦しい漁業経営を強いられているのが現状である。

しかし、他地域に比べ比較的后継者に恵まれており、漁業に対する意欲、前向きな姿勢は全く衰えておらず、漁業経営安定のために役職員始め組合員が一体となって経営改善に取り組んでいる。



図1 位置図

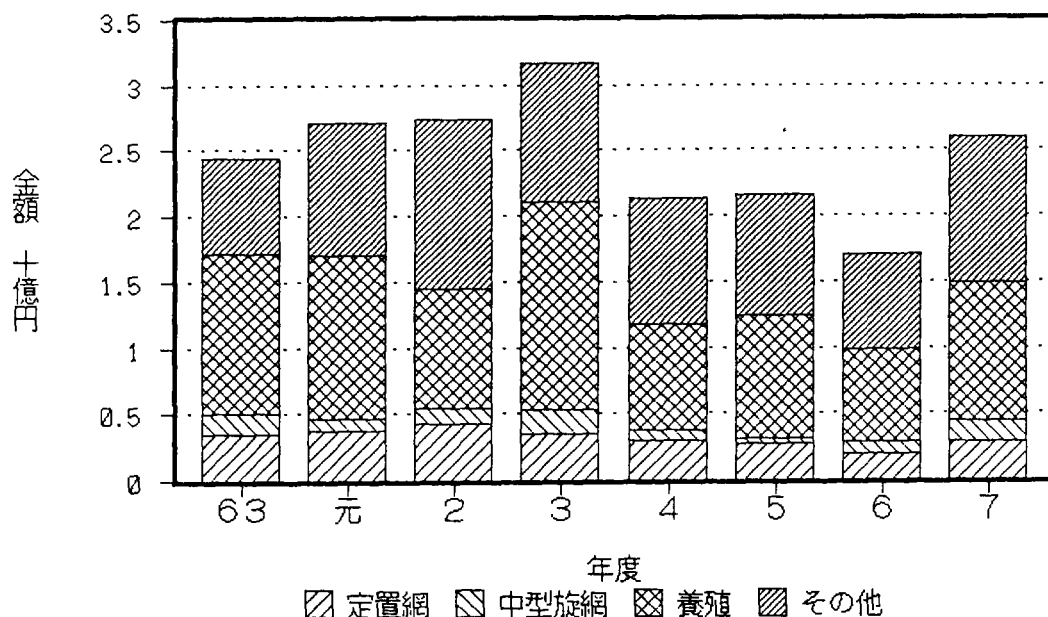


図2 内之浦町漁協水揚げ金額の推移

2 漁業を開始して（漁師への第一歩）

昭和58年，生まれながらの海の男であった私の父は，経営していた養殖業に失敗し，倒産を余儀なくされてしまった。その時私は，まだ高校在学中の17才であったが，小さいころから漁師になることを心に決めていたので，高校を中退し漁師になることを決意した。漁業に対する技術も知識もなかった私は，叔父の経営する定置網漁業に従事することから漁師への第1歩を踏み出すこととなった。定置網の仕事は，朝の9時ぐらいまでには，水揚げが終了するので，昼間は，陸でアルバイトをする傍ら，先輩に教わりながら船外機で内之浦湾近海にでかけ，イカ釣りやホゴ縄（アラカブ）に挑戦した。今考えるとほとんど漁師のまねごとに過ぎなかったような気がする。

20才のころ，地域の青年団活動で現在の妻と知り合い結婚，長男が誕生，これを期に，家族を養うためにも，そして父のやっていた仕事をもっとよく知りたいという気持ちもあり，21才で養殖業に従事することとなった。3年間従事したが，漁船漁業に漁師としての夢を抱いている私には，あまり満足できる仕事ではなかった。

24才の時，漁船漁業を営む義父（妻の父）の誘いもあり，一緒に待望の漁船漁業を始めることとなった。その時義父は，新たな決意を持って，それまでの木船から新船を建造するに至った。イセエビ網，磯建網，ます網，アラ縄，イカ釣等，漁船漁業の厳しさをこの時初めて学ぶこととなった。2年間で過ぎ，少しずつ漁業にも慣れ，自分なりの漁業に対する考え方を持つようになり，義父ともたびたび意見の食い違いが生じてきて，考え方に対する反発心も大きくなってきた。そして，26才の年，独立を決心し，“今月一杯で暇を下さい。自分でやりたい”と義父に宣言した。義父には，その時をもって勘当を言い渡された。妻にも大変心配をかけてしまった。今考えると義父の気持ちもあまり考えない，若さが爆発したわがままであったと思っている。

3 漁船建造（漁師としての独立）

平成4年9月，26才の時，待望の新船“綾美丸3.4t”が完成した。その時の喜びは今でも忘れることはできない。進水祝いには，当然義父には，出席してもらえなかったが，届けられた祝いの焼酎は，本当に嬉しかった。漁船建造の時，“気張らなくてはいかん！家族のためにも，そして義父にもわかってもらえる立派な漁師になるぞ！”と心に誓った。

漁船漁業で，安定した収入を得るために，漁船建造後，私はすぐに，表1に示した組み合わせによる漁業を行うようになった。

私が，現在の組み合わせ漁業を行うにあたって，これまでに2つの重要な取り組みがあった。この2つの取り組みについて以下に述べたいと思う。

漁業種類	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	年間水揚げ高千円 (過去3年平均)
トカ川漁業														458
モジャコ採捕漁業(従)														350
アマダイ流し釣漁業														996
イカ釣漁業														855
他エビ網漁業														1,200
アラ縄漁業														450
棒受網漁業(従)														600
														4,909

表1 年間組み合わせ漁業

4 2つの試験事業への取り組み

(1) アマダイ立縄流し釣漁業の習得

内之浦ではアマダイを対象とする漁業として延縄漁業が操業されていたが，操業者も少なく，それほど有効利用されている魚種ではなかった。しかし，以前から志布志湾沖合いでは，宮崎県船30隻ほどが，アマダイを対象とした延縄漁業とこの立縄流し釣漁業

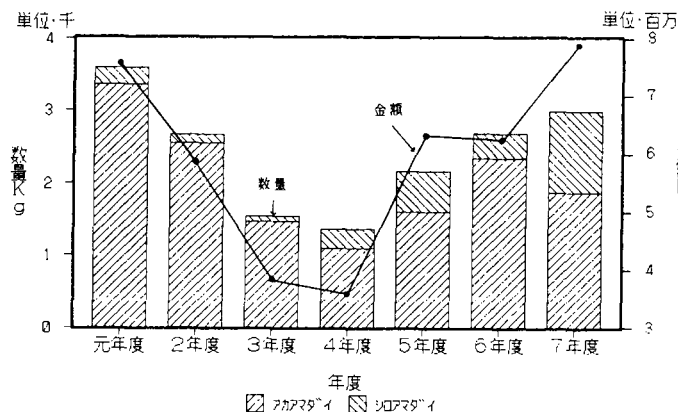


図4 アマダイ水揚げの推移 (内之浦町漁協)

日	平成 11 年 9 月 9 日
天	晴れ
時	10 時 30 分 ~ 5 時 00 分
水	80~120m
網の状況	良い
使用網目数	8 目
捕獲量 (kg)	52

品名	数量	単価	金額	口数
トサカノリ	23	22.6		
タコ	4	2.7		
イサナ	3	2.9		

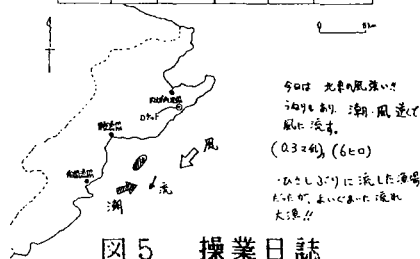


図5 操業日誌

(2) トサカノリ増殖試験への取り組み

トサカノリ漁業は、内之浦では昭和61年より開始され、平成3年には、これまで最高の20トン、1千4百万円の水揚げがあったが、平成7年は、11トン、6百70万円の水揚げで、年々減少傾向にある。(図6) トサカノリ漁業は、短期間である程度の水揚げの得られる魅力ある重要な漁業種類である。私も平成4年度より本漁業を開始しており、もじゃこ漁前の重要な仕事となっている。

資源枯渇の危機を感じたため、普及所に、ワカメのような種糸展開による増殖法はできないものかと相談してみたところ、トサカノリの増養殖技術は、ほとんど確立されていないという現状を知らされた。どうすればよいかと頭を悩ませていたところ、普及所より水産資源保護協会の漁村研究実践活動事業の紹介を受け、私が部会長をさせてもらっている小型船主会トサカノリ部会で増殖試験に取り組んでみるということとなった。

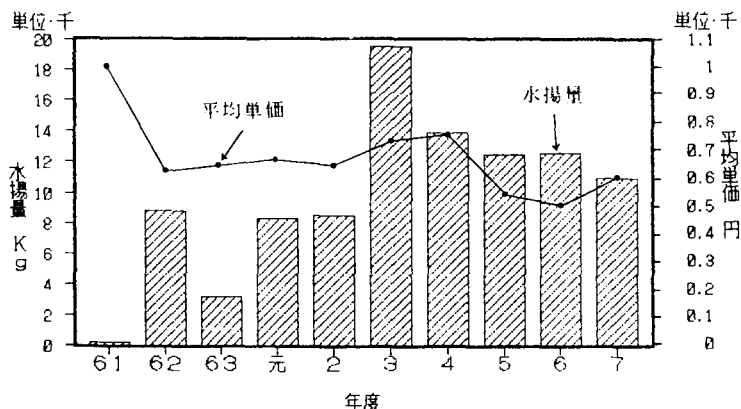


図6 トサカノリ水揚げの推移 (内之浦町漁協)

試験の内容として、天然採苗用基質としてのコンクリートブロックの投入(図7)と母藻投入による増殖試験(図8)を行った。

胞子放出の最盛期である6月に、トサカノリ繁茂区(図9ーア、イ)に投入したブロックからは、9月には1~2cmに成長したトサカノリの幼体を確認することができた(写真1)。その後台風の過ぎ去った10月にこのブロックの一部をトサカノリ減少区(図9ーウ)に展開し、観察を続けたところ、3月には、最大で藻体長12.8cmのトサカノリを確認することができた(写真2)。ブロックと他の瀬とのトサカノリの付着数を比較して見ると明らかに投入ブロックからの発生が多かった。

母藻投入については、母藻を挟み込んだロープをブロックで固定しながら、トサカノリ減少区(図9ーウ)に設置してみたところ、固定用ブロックから多くのトサカノリの発生が確認され、母藻投入についてもある程度の効果が期待できる感触を得た。

台風接近による時化のために、湾口の試験区(図9ーイ)に投入したコンクリートブ

ロックが、紛失してしまったり、せっかくトサカノリが付着成長してもブロックの転倒移動により脱落してしまったり、ガンガゼ等の食害生物の多い試験区（図9ーア）のブロックについては、3月にはほとんどトサカノリの付着が見られなくなった（写真3）などの問題点もあったが、採苗用の基質としてコンクリートブロックのような材質が適していること、母藻投入の効果も期待できる感触を得たこと、そして、何よりも1年を通じて海中で実際にトサカノリの成長を観察することができたことは、漁師への道をつきすすむ私にとってかけがえのない経験となった。

また、水産試験場より講師を招いてトサカノリの生態と生活史について（図10）の学習会を開催してもらったことで、自分達が収穫しているトサカノリの特徴について詳しく理解することができた。これまでのただ採取して水揚げすればよいという感覚から、特に収穫期がトサカノリ胞子放出の最盛期と重なることから、ブツブツのあるオニクサ（胞子が形成された囊果のある母藻）については、翌年の収穫となるトサカノリの胞子を放出するので水揚げしてはならないという決まりが業者会で徹底されるようになり、資源管理の重要性が漁業者の中に浸透してきたようである。

また、我々の活動の成果により、今年度からは町と漁協が補助してくれることになり、コンクリートブロックに母藻入り網袋をくくりつけ、採苗用基質と母藻を同時に、そして時化にも耐えるように瀬と瀬の間にかっちりと一固まりに設置したり、大きな瀬の一部をワイヤーブラシでこすることで磯掃除の効果を試験したり、食害防止籠入りブロックの設置により食害防止試験を実施したり、さらに水産試験場の連続観測水温計を設置し、水温との関係についても試験するなど、昨年度の反省を生かしながら継続して実施しているところである。現在は、試験的に小さな規模で実施しているのでトサカノリ水揚げ増大につながるまでにはいたらないが、今後この試験が大規模な増殖につながることを期待し、継続していきたいと考えている。

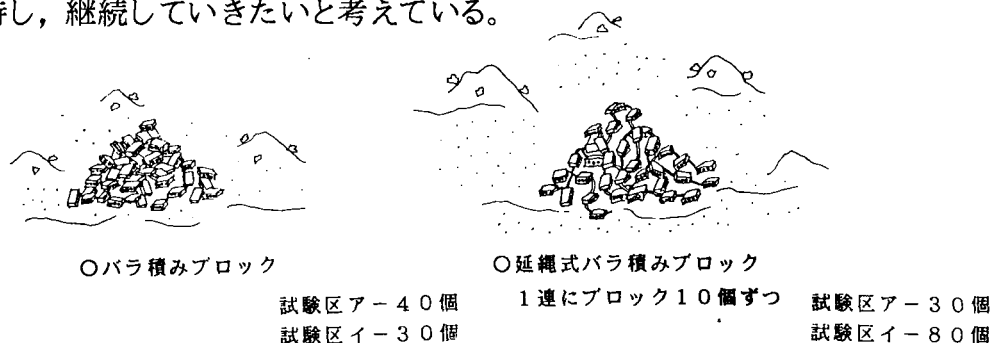


図7 天然採苗試験（コンクリートブロックの設置方法）

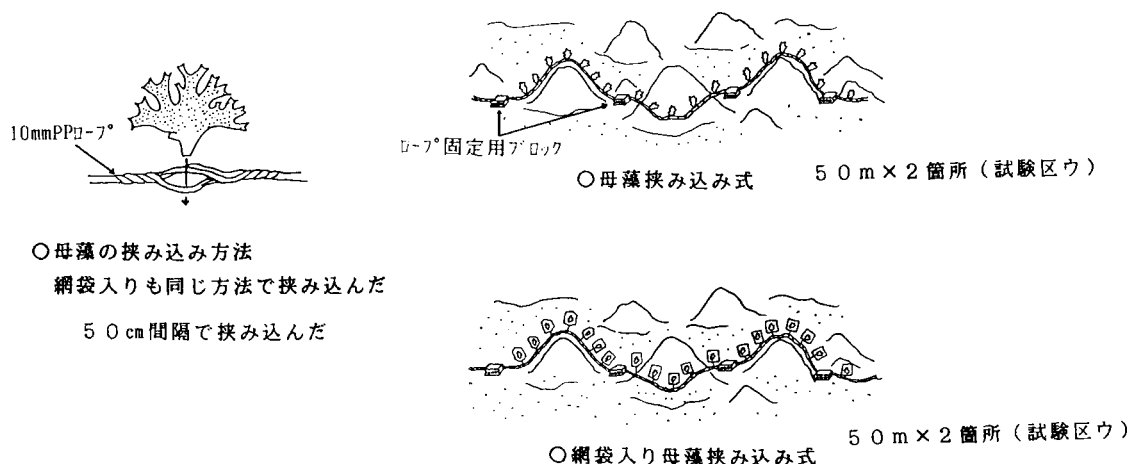
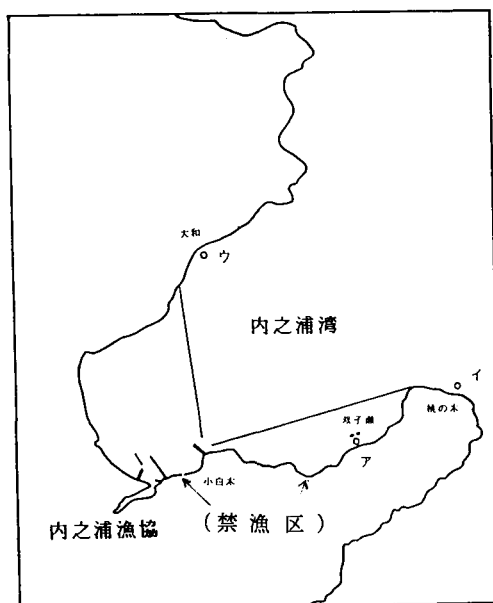


図8 母藻投入による増殖試験



図9 試験場所



トサカノリは、地域によって異なるが水深5～30mの範囲に局所的に分布し、浅所ではアラメ、カジメ海中林の切れ間や岩礁の斜面、谷間などに、深所では岩礁や転石の上面に点在して生育している。生育量は年変動があり、高水温の年に多いようである。葉体は、地域によって異なるが6～9月にかけて成熟し、多量の胞子を放出する。9月以降から葉体は枯れはじめ、10月くらいまでには消失するものと思われる。また、11、12月ころから再び岩礁上に体長1～3cmの幼葉体が観察されるようになり、冬季から初夏にかけて急速に成長し、次第に葉体の厚さも増し、6月ころには体長20～30cm前後に達する。

トサカノリは1年生の海藻で、配偶体期と孢子体期が1年おきに世代交代していると考えられている。

配偶体の雌性体は成熟すると、精子と受精し、葉面や縁辺部に多数の嚢果を形成して果孢子体となり、果胞子を放出する。ただし精子についてはまだ観察されていない。

孢子体は皮層部に多数の四分孢子嚢（環状分割）を形成して四分孢子体となり、四分胞子を放出する。

放出された胞子は、果胞子、四分胞子ともに直径17μm前後の球形で、いずれも直径80～100μmの盤状発生体を経て直立体を形成し、葉状体に成長するが、配偶体と孢子体の葉状体は外見上同形であり、いわゆる同型世代交代を行っている。（水産学シリーズ88食用藻類の栽培より喜田和四郎氏、谷口三津夫氏の文献「トサカノリ」からの引用）

トサカノリの生活史

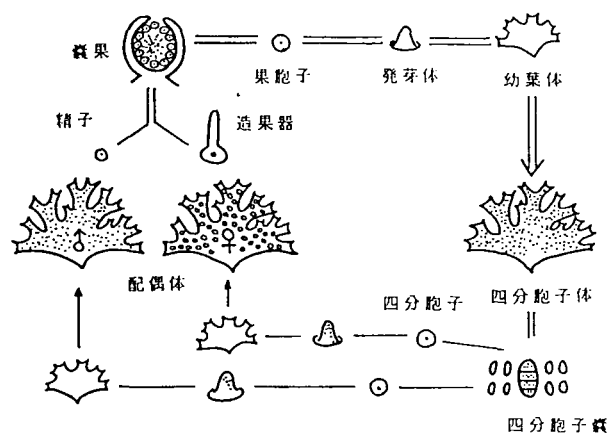


図10 トサカノリの生態と生活史

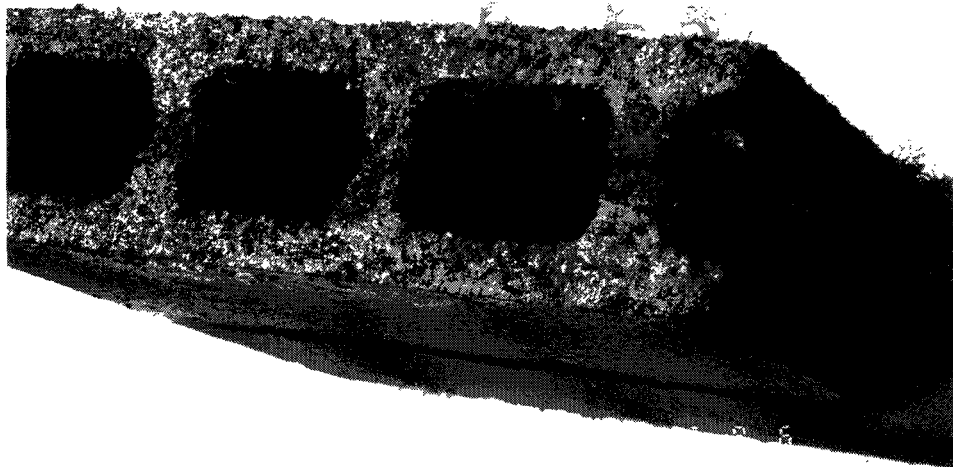


写真 1



写真 2

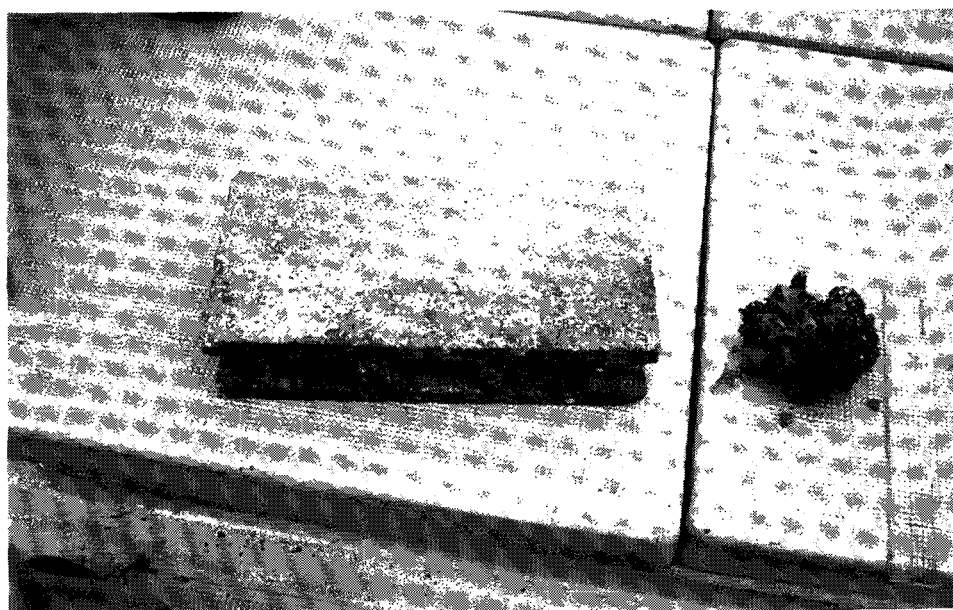


写真 3

図 1 1 トサカノリ増殖試験結果写真

5 今後の課題（一人前の漁師を目指して）

私は、私の現在の状況を今述べた2つの試験事業への取り組みと同様に、一人前の漁師になるための修行期間と考えている。そしていろいろな漁業に挑戦したいという欲や沖にでて魚を追いつける漁業をやっていききたいという希望があるので、まだまだ無駄が多いのも事実である。船も小型なので自分でできる漁法も限られている。しかし、いつかは、このような多くの経験を積む事によって自分なりの漁業を完成させ、6, 7tクラスの船を建造し、現在の倍くらいは水揚げをしなければと考えている。

幸いにも、内之浦町漁協には漁業後継者が多く、現在の後継者不足の問題が深刻化している中で、多くの同年代の仲間にも恵まれている。青壮年部活動や同じ漁師として競い合い励まし合うライバルとしてはもとより、先進地視察先やプライベートでの飲み方など苦しいこといやなことをすべて忘れる楽しい時を過ごせる仲間の存在は、私の心の支えでもある。そして、この仲間達と力を合わせて内之浦の漁業を支えていかなければという責任を感じているのも当然のことである。

そして、まだまだ苦勞をかけている妻や3人の子供達、義父をはじめとした先輩漁業者、漁師になる希望を持っている弟や後輩達にも自信を持って話のできる一人前の漁師になりたいと思っている。そして、離れ離れになっている両親を内之浦に呼び戻し、家族みんなで内之浦の海で過ごすのが私の夢である。

キビナゴ流網漁業の経営安定に取り組んで

—価格の安定と資源管理に取り組んで—

種子島漁業協同組合西之表市キビナゴ生産者協議会
荒 河 勝 文

1 地域と漁業の概要

種子島は、九州本土最南端鹿児島県佐多岬から南方約43kmの洋上に位置する細長い島で、1市2町から成り人口約4万人、第1次産業の盛んな島である。

1953年日本で初めて鉄砲が伝わった島として有名だが、現在はロケットの打ち上げ基地で知られる種子島宇宙センターがあり「宇宙に一番近い島」と言われている。

(図1)

我々が所属する種子島漁協は、平成5年12月1日に西之表市漁協と中種子町漁協の広域合併によって発足し、平成7年度で正組合員529名、准組合員401名の計930名、水揚量1,534トン、水揚金額、12億7千7百万円である。

主な漁業は一本釣り、磯建網、トコブシ漁、キビナゴ流し網、トビ魚ロープ曳き網等であるが、その中でキビナゴ流し網漁業は、漁獲量で2割、漁獲金額で1割を占め当漁協の基幹漁業の一つとなっている。(図2, 3)

2 研究グループの組織と活動

(1) 組織

ア 組織化の経緯

種子島沿岸は、昔からキビナゴの資源が豊富で狩刺網等で漁獲されていたが、集魚灯の使用によるキビナゴ流網漁業が昭和58年頃当地に導入された。

その当時、従来からのキビナゴ漁業者や他の一本釣り漁業者からキビナゴ資源への影響を心配する意見や漁場利用に関する競合が起こり、漁場利用及び資源保護の対策を図る為、昭和59年にキビナゴ流網漁業を行う19経営体が西之表市キビナゴ生産者協議会を結成した。

イ 組織の内容

会員は昭和63年の33経営体を最高に、現在は20経営体となっており、役員は会長、会計、電話係が各1名である。

会の目的は、他の漁業との漁場利用の調整、キビナゴの資源管理を行うことであり、近年では出荷調整、品質の向上等による価格の安定策の実施も目的に加えている。

(2) 活動

ア 漁期前

漁協理事会の諮問機関である漁場管理委員会で決定された当期の漁期、操業方法等を7月頃の総会で再確認を行う。

イ 漁期中

8月中旬から2月末までの漁期中は、その日の各船の漁獲情報、市場の情報などを電話係を中心に交換し、鹿児島市場、地元市場での出荷調整を行う。

ウ 漁期終了後

3月に、その漁期の操業等についての反省と改善点を話し合い、翌年度の操業方法を協議し漁場管理委員会へ伝える。

漁場管理委員会は、毎年各種漁業の操業について調整を行い、理事会はその年の操業方法・期間・区域を決め、協議会へ通達することになっている。

3 課題選定の動機

協議会が設立された当初、従来から行われていたキビナゴ狩刺網漁業の漁期（7月～翌年4月）、时期的な価格（夏場価格の低下）、加工時期（夏場は干しキビナゴ作りに不適）、資源保護（産卵期の保護）、その他の漁業等にも考慮して操業期間の制限を行った。

その後、経営体の増加もあり徐々に漁獲量が伸び、昭和63年に初めて年間300トン突破した。

しかし、地元市場への出荷にばかり頼っていた結果、生産量の増大に伴い価格の低下を招いた。

そこで協議会では、継続的に漁業を営むための「資源の維持」と「価格の安定」の両立を検討協議し、積極的にその対策を行うようになった。

4 活動の状況（表1）

(1) 操業期間の制限（昭和59年度実施）

この協議会の設立当初の昭和59年からは、キビナゴ産卵期の3～8月の上旬の約5カ月を禁漁期間として資源の保護を図った。

(2) 鹿児島市場への積極的な出荷（平成元年度実施）

漁獲量の増大に伴い地元の市場価格が低下した。（昭和62年の400円/kgから昭和63年の333円/kgへ低下）その対策として、積極的な鹿児島市場への出荷を実施した。

(3) 電話係を中心とする出荷情報の共有化

鹿児島出荷を円滑に実施するためその日の地元漁船の漁獲情報、鹿児島市場の出荷情報などを電話係を中心に情報の交換を行い、各船が的確に市場選択が出来るようにした。

(4) 共同出荷の実施

鹿児島への出荷は、地元への出荷に比べ経費がかさみ、少量の出荷では採算が合わなくなることから、個別の出荷の他に共同出荷を行った。

(5) 出荷量の制限（平成元年度実施）

鹿児島出荷を開始した当初、鹿児島市場でも多量のキビナゴを一度に出荷した為、価格の低下を招いた。よって年度途中に、その対策として1隻当たり1回当たりの出荷量の上限を設定（地元出荷20箱/隻、鹿児島出荷30箱/隻）して、価格の安定と乱獲防止を図った。

(6) 網目の規制（平成2年度実施）

鹿児島市場へ出荷していくなかで、市場での大型キビナゴの需要の高さを知った。そこで種子島キビナゴのブランド化を目指し、また小型キビナゴの保護のためにも、使用漁具の網目を20～21節から19節以下へ統一して大型キビナゴの出荷を可能にした。

(7) 操業時間の制限（平成2年度実施）

それまで操業開始時間の取り決めはなく、各船競い合って操業開始時間を早めてい

たが、漁獲から出荷までの時間を短縮することで鮮度の良いキビナゴが出荷できることと過度な競争を避ける目的で操業開始時間を設定した。

5 活動の成果

(1) 価格安定策の効果

種子島のキビナゴは、操業期間の規制、高速船による漁獲後短時間での鹿児島市への出荷、網目の規制により、「大型で鮮度の良いキビナゴ」という市場関係者の評価を受けている。

同時に市場での値崩れを防ぐため出荷量を規制している効果もあり、他の産地と比較しても高い平均単価となっている。（図4）

また、月別にその出荷量と単価の比較を行っても季節風の影響が強くなり市場への出荷が遅れる2月を除いて、出荷量がピークとなる10月をはじめ常に他の産地と比較して高い単価となっている。（図5）

地元市場への出荷割合も約6割ほどに低下し、積極的に鹿児島出荷を行う以前の昭和63年の平均単価1キロ当たり333円と比較しても平成7年度を除いて常に高い単価となり（表2）漁協のキビナゴ総水揚げ金額の上昇となった。（図6）

さらに、従来漁獲量の増大に伴い価格の下落を招いていたが、昭和63年以降数量の増大を図りながら単価のアップを達成できた。（図7）

なお、平成7年度の単価下落は、商品価値の低い腹の赤いキビナゴの大量発生が原因で起こった。

現在、各船操業時間を変えるなどしながらその対策を検討している。

(2) 資源管理の効果

操業期間の制限、出荷量の制限、網目の規制を実施した結果、これまで漁獲量の増減はあるものの、ここ10年で年間漁獲量250トン以上の好漁期が6割、300トン以上の大漁期が4割あり、魚体の小型化も見られないことから、長い間の資源管理の成果があったと考える。（図7）

(3) 組み合わせ漁業の効果

種子島のキビナゴ漁は約7カ月の操業期間であり、その他の期間は他の漁業を営むことになり、そのことにより漁業の複合化が進んだ。これにより多少のキビナゴの好不漁をカバーできるようになった。（表3）

6 今後の課題

(1) キビナゴ資源の保護について

これまで親魚の保護を中心に資源管理を行ってきたが、今後は、それと同時に産卵場の保護が出来ればと考えている。キビナゴは、水温が下がる冬場に沿岸に近づき産卵すると聞いておりその産卵場も沿岸の特定の砂場に限られているとのことなので、その保護を行い資源の維持を図る必要があると考える。

(2) 県内キビナゴ主産地間の連携

他の海区と漁期や出荷について協議し、全県域での資源管理、価格安定策を図りながら、キビナゴ生産漁業者が共存できる仕組みが出来ないか将来的な課題としたい。

(3) 価格の安定について（種子島産キビナゴのブランド化の促進）

これまでも「種子島のキビナゴは、型が大きくて新鮮である。」と市場関係者から評価をもらっているが、今後は、消費者に対しても「種子島キビナゴ」を宣伝して、消費者から支持されるキビナゴを目指したい。

その具体的な方法の一つとして、消費者に「種子島キビナゴ」をもっと知ってもら

うという意味で生産者による産直も課題にして取り組みたい。

(4) 乗組員の確保

現在、キビナゴ漁業でも厳しい労働条件や変動の激しい賃金などが原因で若い乗組員の不足と乗組員の高齢化が進み経営の維持がだんだん難しくなっており、当面の課題となっている。

7 最後に

今年は、キビナゴの漁獲があがらない。しかし見方を変えれば、これだけの管理を実施しているからこそ他の魚の資源が減少していくなかで現在の漁があるのだと思う。

今後も漁業で生計を立てていかなければならない私たちにとって絶対に価格の安定と資源管理の両立は避けては通れない課題となっている。

よって、今後積極的にこの問題と取り組むためにも資源量の把握や生態調査など、その年の産卵状況による漁海況予測などの基礎データなどが有り、経営的な面も考慮してどの時期にどれくらい捕って出荷したらよいのかを判断する情報が有ればと切に思う。

私と同じように海で育ち、海に帰り、また海により子供を育てようとする若い漁業者がたくさん現れるような魅力ある漁業にしていきたいと思う。

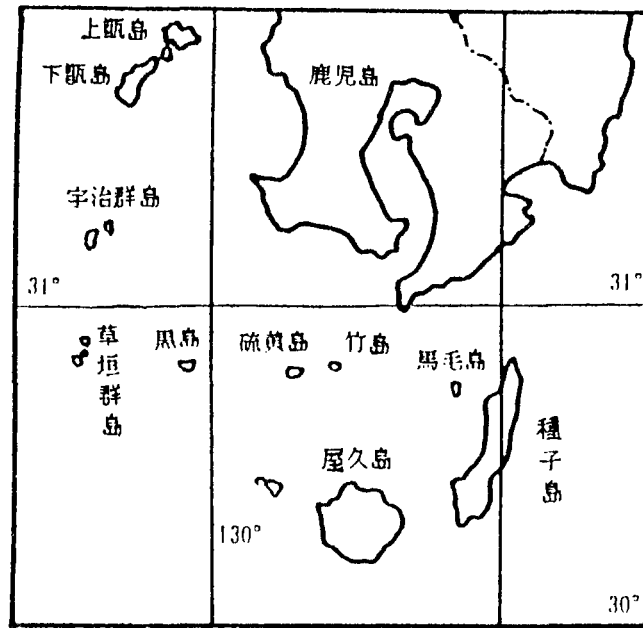


図1 位置図

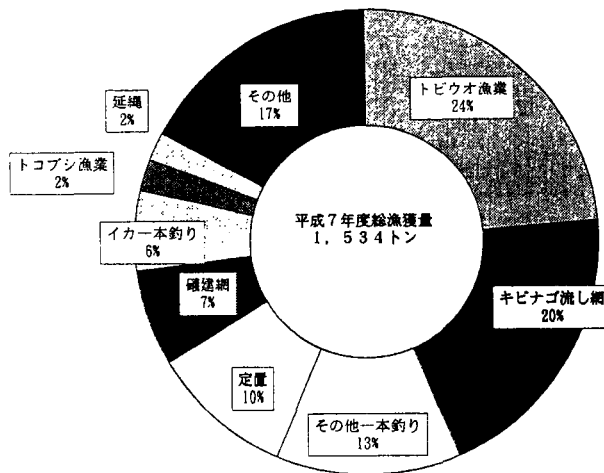


図2 種子島漁協における各漁業種類の漁獲量の割合

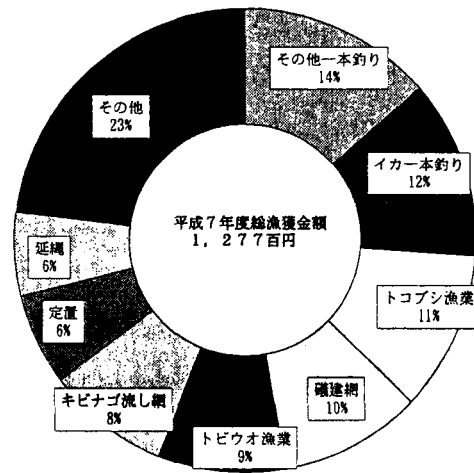


図3 種子島漁協における各漁業種類の漁獲金額の割合

表1 西之表市キビナゴ生産者協議会が行った活動の経緯

実施年度	内 容	実施理由
昭和59年度	1 操業期間の制限（8月中旬～翌年2月）	1 キビナゴ産卵期間の保護による資源管理の実施
平成元年度	2 鹿児島市場への積極的な出荷の実施 3 市場への出荷量の制限（1回に地元20箱／隻，鹿児島市場30箱／隻）	2 地元市場価格の安定と生産金額の向上 3 市場価格の安定と漁獲量制限による資源の保護
平成2年度	4 網目の規制（19節以下の網目を使用） 5 操業時間の制限（操業開始時間を午前2時半以降とする）	4 大型魚の出荷による市場価格の安定と小型魚の保護 5 鮮度の良いキビナゴの出荷による市場価格の安定と過当競争の防止

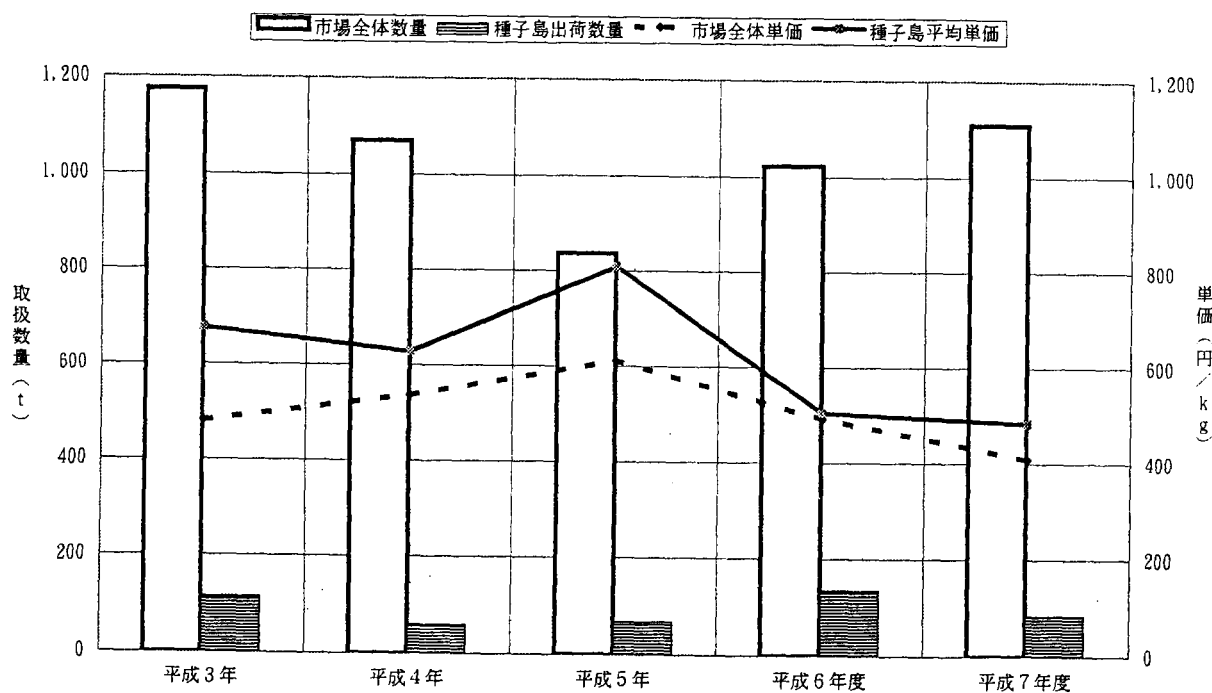


図4 鹿児島市場における種子島産キビナゴの単価比較

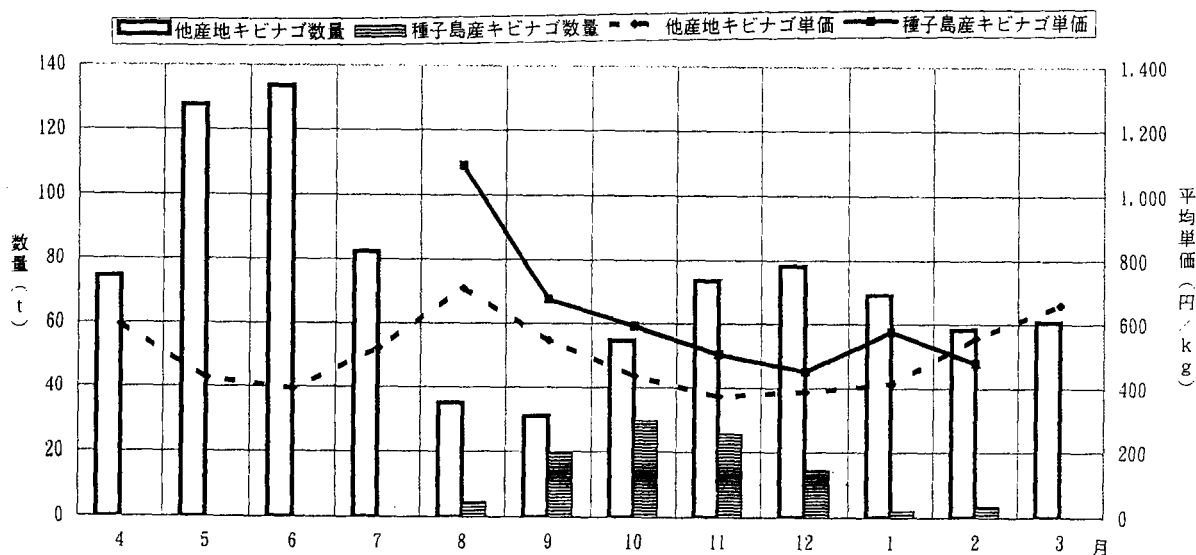


図5 鹿児島市場での種子島産キビナゴと他産地キビナゴとの月別比較（平成5年度～7年度）

表2 キビナゴ市場取扱高及び漁獲量、金額等の推移

	地元出荷			鹿児島出荷		
	数量 (t)	金額 (千円)	単価 円 / kg	数量 (t)	金額 (千円)	単価 円 / kg
平成3年	161	78,585	487	117	79,122	677
平成4年	141	73,830	522	61	38,267	628
平成5年	86	49,992	579	70	56,680	809
平成6年度	179	77,683	434	137	69,182	505
平成7年度	222	64,850	293	86	41,765	484
平均	158	68,988	437	94	57,003	605
割合 (%)	63	55		37	45	

平成5年12月1日より漁協合併により平成6年度より事業期間が変更

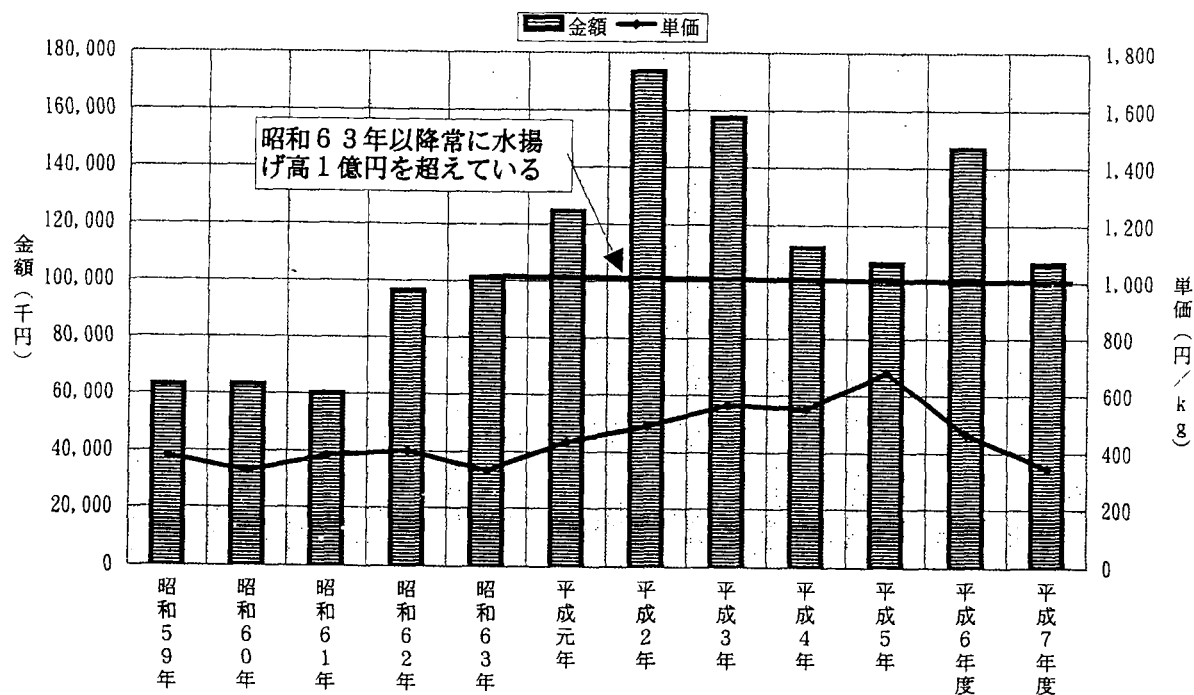


図6 種子島漁協のキビナゴ取扱金額及び平均単価の推移

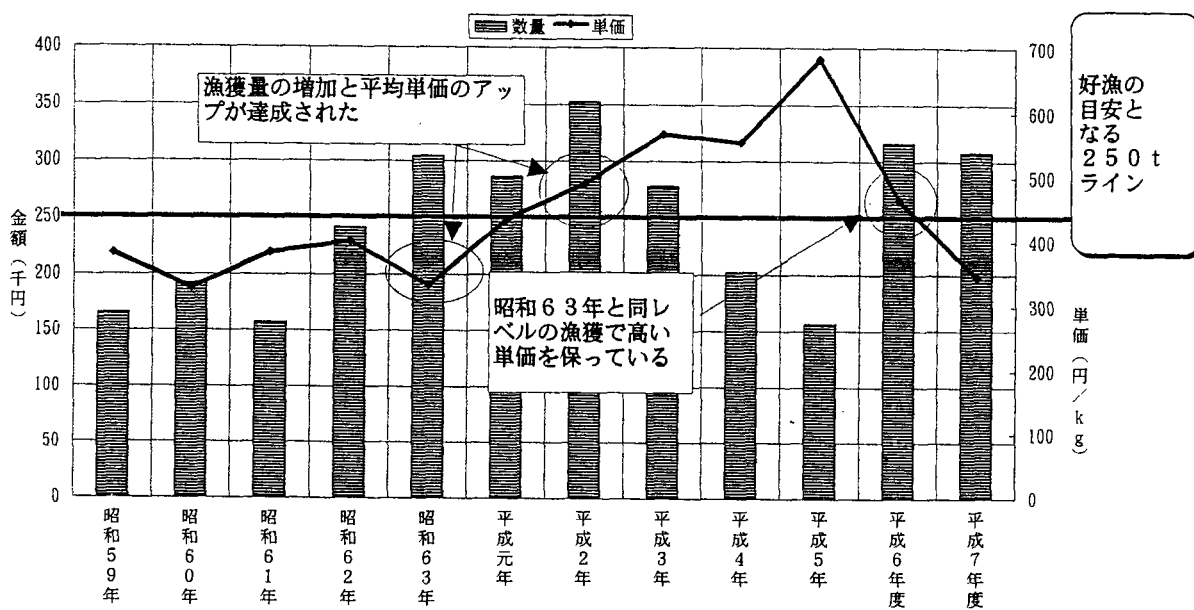


図7 種子島漁協のキビナゴ取扱数量及び平均単価の推移

表3 キビナゴ漁業と他の漁業との複合化状況の例

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	漁業収入割合(%)
漁業種類													
キビナゴ流網	—	—						—	—	—	—	—	60
モジャコ網				—	—								20
碓碓網						—	—	—					10
延縄						—	—	—					10

奄美の新しい漁業を目指して

宇検村漁業協同組合青年部 山下雅吉

1. 地域と漁協の概況

私達の宇検村は、奄美大島本島の南西部に位置し、北は大和村、東は住用村、南は瀬戸内町に接し、西は東シナ海に面しています。村の面積は約 103km² その9割以上が山岳地帯で占められ、本島の東西に走る連峰が細長い焼内湾を抱えています。村の人口は 2,492名で就業者の約 1割が水産業に従事しています。

焼内湾は、東西約14km、南北 2km、水深20～60mの細長い大きな内湾であり、海岸線は変化に富み、ここでは、波静かな環境を生かした養殖業が営まれています。湾内の主な漁業は養殖業で、以前は真珠養殖業が盛んでしたが、近年ではマダイを主とした魚類養殖業に切り替わりつつあるようです。

宇検村漁協は昭和29年7月に設立され、現在の組合員は、正組合員114名、准組合員94名、合計208名です。

漁船は156隻（3トン未満144隻、3トン以上12隻）、漁業種類としては、真珠、魚類、クルマエビの各種養殖業を中心に、瀬物一本釣り、刺し網、定置網漁業等が営まれています。宇検村の生産量は、養殖業を中心に伸びつつありますが、漁船漁業は年々、減少傾向にあります。（図-2、3、4、5）

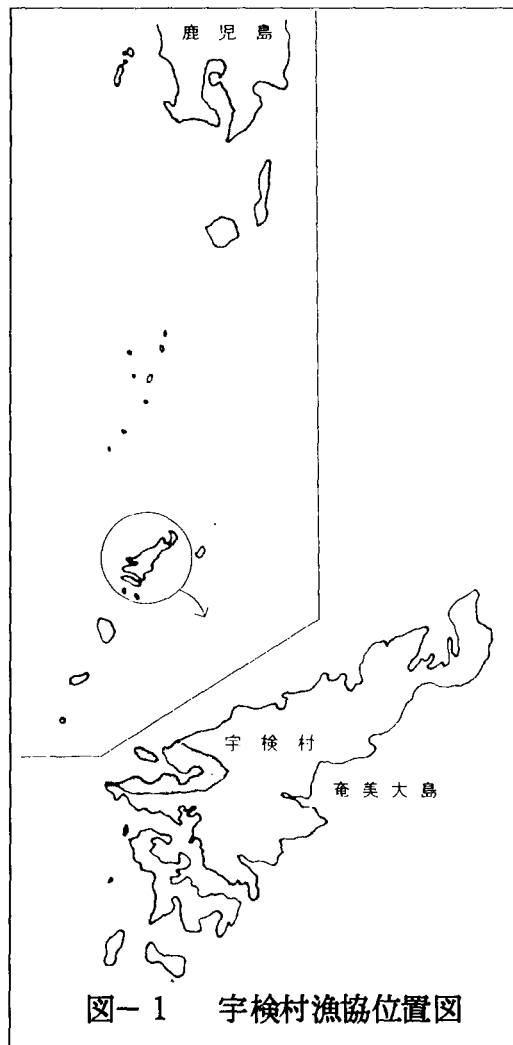
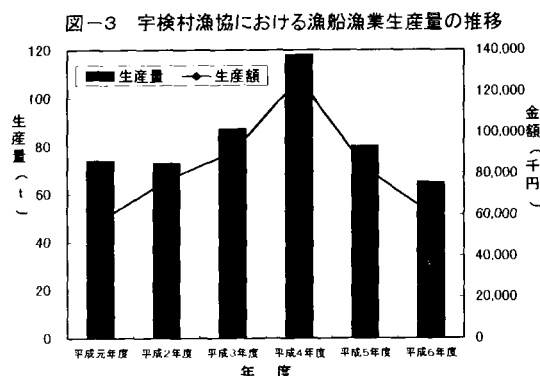
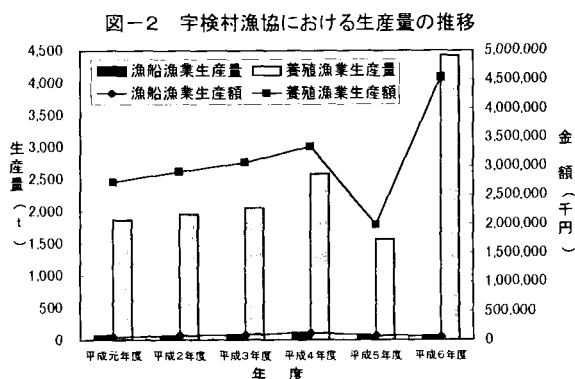
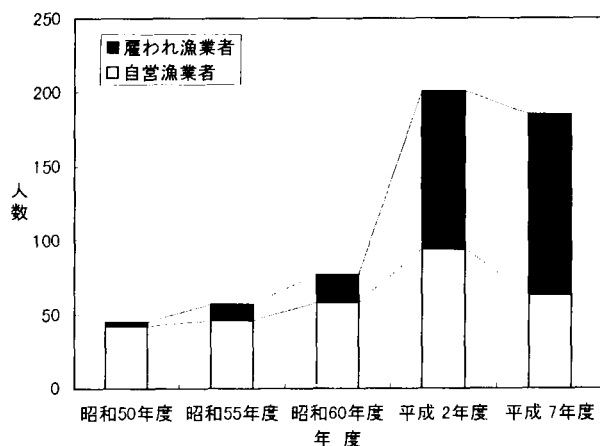


図-1 宇検村漁協位置図

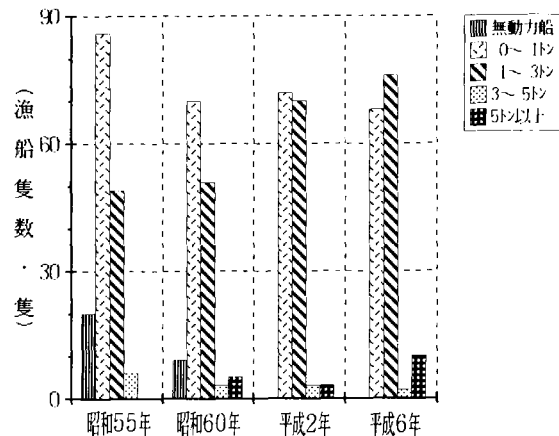
（資料提供：大島支庁）



図－4 宇検村における漁業就業者数の推移



図－5 宇検村漁協漁船数の推移
規模別漁船数：奄美群島水産概況



2. 就業の動機

私は昭和37年に大阪で生まれ、10歳の時に両親とともに奄美大島の宇検村へ来ました。その後、中学まで地元で暮らし、昭和53年に山口県にある国立商船高等専門学校へ進学し、船乗りを目指しました。しかし、その頃、父は、ムロアジ網漁業から中型まき網漁業に転換したばかりで、人手が足りないと嘆く父を見るに見かねて、父の仕事を手伝おうと決心し、高校を中退し奄美大島に帰ってきました。

帰ってきてからは、魚の群をいち早く見つけて集魚するという、まき網船団で一番重要な火船の船長を任されました。その頃の奄美の海は魚が多く、多い日は1日で20トンあまり獲れ、漁獲物は主に鹿児島や沖縄に出荷し、奄美初のまき網漁業として安定した経営を続け、やりがいのある毎日でした。

しかし、その後、昭和50年代後半になり、本土からの大中型まき網船団の進出と共に、ムロアジ資源が急速に減少し、一日の水揚げが1トン前後と、最盛期の水揚げの20分の1にまで落ち込むようになりました。そして、ほどなく経営不振に陥り、昭和62年まき網漁業廃業へと追い込まれてしまいました。

奄美で漁業が成り立たなくなったので、私はやむなく東京へ働きに出て、広告関係の会社でサラリーマンをしました。一方父は、まき網漁業から次の漁法を模索し、平成元年に県本土の阿久根から棒受け網漁業を導入しました。棒受け網漁業は、まき網漁業と違い少人数で操業が可能ですが一人では操業できないため、父から「今度は棒受け網をするから帰ってこい」と誘われ、平成元年9月、再び奄美に帰ってきました。

帰ってきたものの、阿久根から学んだ棒受け網漁法を、そのまま奄美海域にあてはめて操業できる訳ではありません。阿久根の棒受け網は、漁船規模が5トン以上の大型船で、1隻当たり4名前後が乗り組んで操業します。しかし、私の船は2.2トンと小さく、父と二人で操業するので、網を小型化したり、さらに省力化を進める必要がありました。そのため、帰ってきた1年目は、漁法の試行錯誤を続け改良を重ねることに費やしたため、本格的な操業には至りませんでした。

翌年から、キビナゴやタイワンアイノコ、メアジ、ムロアジ等を対象に操業をはじめなんとか軌道に乗り始めました。獲れた漁獲物は、主に地元の養殖業者の餌用に出荷し、鮮度がいいため、需要はドンドン伸びていきました。価格こそ150円/kgと安価でしたが、獲れば獲っただけ売れたので、操業もしだいに養殖業者の要望にあわせて操業するようになりました。その頃の1日の水揚げが200～300kgほどで、年間50トン

前後の水揚げがありました。

ところが、平成4年後半頃から景気が後退するとともに、取り扱いが簡単で自動給餌機が使える、人手が減らせる配合飼料へ養殖業の形態が変化し、しだいに生餌の需要はなくなってしまいました。その頃から市場への鮮魚出荷を始めたのですが、地元の市場は小さく例えば、100kg以上出荷すると、通常価格が400円～500円/kgするキビナゴやメアジが、50円/kgほどに値崩れしました。そのため、地元出荷以外の販路として鹿児島、沖縄市場への出荷も試みましたが、魚価安という問題を解決できませんでした。

そのため現在は、村外出荷は行わず、村内で販売するようにしています。漁獲量もそれにあわせ、棒受け網の操業は1週間に1回程度操業し、50kgの漁獲量を目安にしています。これは、浜売りでキビナゴが500円/kgと価格が安定していることと、資源の減少を招くのを恐れたためです。浜売りの量しか漁獲しないため、今では、小型化した棒受け網の網をさらに小型化し、雑魚の混入を防ぐ工夫をしています。

棒受け網漁業の操業には成功したものの、販路という問題を解決するために、色々考えましたが“市場がないならつくればいい”と逆転の発想から、地場消費を高め、地元の振興の図るため、波静かな焼内湾の枝手久海峡に海上レストランを作る観光漁業にたどり着きました。

しかし、構想はあっても資本がある訳ではなく、一家一丸となって、イカダから関係施設まですべて手作りで作りました。そして、紆余曲折の末、ようやく平成6年7月に、グラスボートを備えた海上レストラン「マリン・スクエア・宇検」として操業を始めることができました。

3. 操業の状況

マリンスクエア宇検では、海上レストランの他、グラスボートやレストランのテラスから釣りをさせていますが、この釣りがなかなか好評です。もちろん自然海での釣りですから、いつも釣れるとは限りません。しかし、堤防や危険な磯釣りと違って安心して釣りを楽しめることや、ゆったりとした自然のなかでの過ごすひとときがたまらないと、お客さんには大好評です。

また、レストランのメニューには、地元の郷土料理を中心に、レストランのイเคスで蓄養している新鮮な魚介類をそろえ、他では味わえない南国情緒豊かな島の味と高い評価を受けています。

私はここを、地場消費を高め、地元の振興に役立てたいと考えているため、レストランで出す素材、魚介類や野菜、果物は、なるべく宇検村のものを使うよう心がけています。なかでも魚介類は、宇検村の素潜り漁業者の捕ったイセエビやサザエ、あるいは定置網に入ったイカやアジ類を買い取っているのので、漁業者の漁獲物の価格向上、ひいては経営安定につながればと思います。

今のところ、マリンスクエア宇検の最繁期は、ほんの短い夏休みの1ヶ月あまりしかありません。そのため、4月から10月の半ばまでは棒受け網漁業を中心に操業を行い、10月下旬から4月までは潜水器漁業を中心に操業を行い、合間を縫って一本釣りを営んでいます。

最近では、青年部の仲間と追い込み網漁業に挑戦しています。青年部活動をとおして知り合った仲間から指導を受けながら、試行錯誤の毎日です。また、追い込み網漁業の次は、トビウオロープ曳網に挑戦する予定にしており、奄美の開発されていない資源の掘り起こしをしていきたいと思っています。

表-1 年間操業形態

月 漁業種類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
観光漁業												
棒受網漁業												
潜水器漁業												
瀬物一本釣漁業												
追込網漁業												

4. 青年部活動と実績

私達の宇検村漁協青年部は、平成5年5月に発足し現在17名の部員がいる、今年で3年を少し経過したばかりの比較的新しい組織です。私は青年部が創立したときの部長でしたが、奄美群島水産青年協議会の副会長に推されたのを機に、漁協青年部の部長と協議会長の副会長の兼任は支障が生じてはいけないと思い、漁協青年部は後任部長にお願いし、現在は、役員として青年部活動を支えています。

漁協青年部の活動内容は、5月の総会や月一度の役員会で話し合って決めます。主なものは、マダイの中間育成や海岸清掃、学習会、視察等や地元の行事への参加などです。また、奄美群島水産青年協議会の活動内容は、藻場造成事業を中心に協議会主催のおさかなまつり、視察研修と各種勉強会等を行いました。

私達は青年部活動を行うとき、自分達は漁協青年部であるということを、いつも念頭に置いて、漁協の事業に積極的に取り組みながら自分達のふるさとの未来に貢献しようとがんばっています。

表-2 宇検村漁協青年部年齢構成表

年齢構成 漁業種類	25～30	30～35	35～40	40～45	計
一本釣漁業	—	1	2	2	5
潜水器漁業	—	2	2	2	6
養殖漁業	—	1	3	2	6
計	—	4	7	6	17

5. 奄美の観光漁業の展望

これからの時代は、国民の余暇を楽しむ時間が増え、マリンレジャーや遊漁を楽しむようになり、一般の人々が海を利用する機会がますます増えていくことが予想されます。手をこまねいていると、マリンレジャーや遊漁船の増加は、密漁や不法操業を招き、根付けの漁業資源の減少や、漁業者と海の利用をめぐる対立しかねません。事実、沖縄では漁業者とマリンレジャーや遊漁船関係者が、対立する事態が生じています。

私も観光漁業を行っている者として、海で生活する漁業者と、海を見せることで商売

としているマリンレジャー関係者と、協力していかなばならないと、私は思っています。競合し、ケンカするのではなく、協調し、譲り合い、助け合う関係にしていきたいのです。そして、漁協の組合員になってもらい、ともに海を守り、栽培漁業の重要性や資源管理の必要性を考えて欲しいのです。

そして、その取り組みは奄美でも少しずつですが進みつつあります。例えば、龍郷町漁協の自営ダイビング案内等です。漁業の欠点は夏季の魚価安、一方マリンレジャーの欠点は冬季の観光客減少ではないでしょうか。そこで、お互いが手を取り、夏は魚価が安いので、漁業者は漁業を休業しダイビングや遊漁案内を、冬は逆にマリンレジャーや遊漁船業者は漁業をしたらいいのではないかと思います。私は、お互いが、相互乗り入れをすることが、今後、必要になってくると確信しています。

6. 今後の課題

現在の観光漁業の重要な問題は、いかに宣伝するかということです。マリンスクエア宇検の営業を始めた当初も、現在でも、ビラを配ることぐらいの宣伝しかできないのが現状です。3年目を迎え口コミでようやく軌道に乗りつつありますが、今のところ利用者のほとんどが、群島内および鹿児島からの観光客で占められているので、今後、もっと広げていけるよう、宣伝について考えて行きたいと思っています。

7. 今後の抱負

私達の奄美群島における水産業は、地域産業に占める割合が大きく、しかもその重要性は年々高まってきています。これは、私達の先輩漁業者達の現在に至るまでの努力によるところが大きいと思います。

しかし、現在の漁業を取り巻く環境は、非常に厳しく、例えば、昨年ようやく解決の兆しを見せましたが大中型まき網問題や道路、地域開発工事等による赤土の流出問題、魚価の低迷等、色々な問題を数多く抱えています。

私達が先輩方から受け継いだ、この美しく、資源豊かな海を、さらによりよいものとして次の時代に引き渡すために、山積する問題を一つ一つ着実に解決していかなければなりません。

私達の足下には“光あふれる海”という宝があります。そして、奄美のこの素晴らしい宝を広くみんなで利用したいと思っています。そのためには、マリンレジャー、遊漁者と一体となって、海を生かしていくことこそが、“浜”の活気だけでなく、奄美全体の活気につながるのではないのでしょうか。そして、私達若い世代が、奄美を活気あふれるものに変えていきたいと思っています。

そのためにも、漁協、村、関係機関のみなさん、今後ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願いします。

平成7年度 活動実績 (H8.5現在)

年 月 日	活 動 内 容	場 所
7. 5. 26	県漁青連 第1回 役員会	鹿児島市
6. 15~16	第2回 奄水青協 役員会・ソデイカ旗流し乗船研修	沖永良部
7. 3	宇検村漁協 青年部 通常総会	宇 検 村
7. 9	シラヒゲウニ, トコブシ追跡調査	宇 検 村
7. 17~20	奄水青協 マグロ流し釣り乗船研修他研修視察	沖 縄
7. 27 27	県漁青連 臨時総会	鹿児島市
8. 6~7	宇検村 どんと祭り 開催準備(船こぎコース設置)	宇 検 村
9. 3	第3回 奄水青協 役員会及びソフトボール大会	宇 検 村
10. 29~30	奄水青協 お魚祭り出店及び奄美群島水産振興大会	名 瀬 市
11. 1	第4回 奄水青協役員会及び県漁青連現地研修会	名 瀬 市
11. 10	奄水青協 未利用資源技術開発研修会(リデ' 飢, 好ウオ?)	名瀬漁協
11. 5	宇検村生涯学習大会への出店参加	宇 検 村
8. 1. 10 ~ 12	県漁業振興大会及び先進地視察 *奄水協視察への参加・振興大会寸劇参加	鹿児島市
1. 20~21 2. 24~25	研修大学 (前期講習) 研修大学 (後期講習)	宇 検 村
3. 4	第5回 奄水青協 役員会	大島支庁
3. 10	オゴノリ・ホンダワラ藻場造成増殖試験	宇 検 村
3. 20	第6回 奄水青協 役員会	名瀬漁協
4. 1	村職域ナイターソフトボール大会	宇 検 村
4. 9	鹿児島県漁協青年部連合会 第12回 通常総会	鹿児島市
4. 11	第1回 奄水青協 役員会	大島支庁
4. 21	平成8年度 奄水青協第2回通常総会, 及びお魚祭り	名瀬漁協

平成8年度 活動計画

年 月 日	活 動 内 容	場 所
8. 5. 15~8. 15	ウミガメ監視	宇 検 村
6. 上旬	奄水青協 第2回 役員会	喜 界 島
6. .	県漁青連リーダー研修会	鹿児島市
7. .	奄水青協 先進地視察	
9. .	奄水青協 第3回 役員会及びソフトボール大会	名 瀬 市
9. .	県漁青連ソフトボール大会	鹿児島市
10. .	お魚まつり(奄水協主催)及び漁業振興大会	名瀬漁協
11. .	県漁青連現地研修会	
12. .	奄水青協 第4回 役員会及び忘年会	宇 検 村
9. 1. .	県漁業振興大会及び先進地視察への参加	
3. .	奄水青協 第5回 役員会	
. 4. .	県漁青連通常総会	鹿 児 島
4. .	奄水青協 第1回役員会及び通常総会・お魚祭り	名瀬漁協
8年度周年周年	オゴノリ・ホンダワラ藻場造成増殖試験 シラヒゲウニ増殖試験, 追跡調査, 役員会	
5~7月	マダイ受入(5月)~中間育成(50日間)~放流(7月)	平田地区

活用度200%の海上楽園

宇検集港から送迎船で
わずか3分!

マリンスクエア宇検

無人島枝手久島のダイナミックな自然で思いっきり飲んで食べて遊べるリーズナブルリゾート

Sea Paradise

エメラルド色の海に浮かぶアミューズメントリゾート

- 海上宴会●大小パーティー
- 海上キャンプ●マリンジェット
- ダイビング(予約制)
- グラスボード(お食入200円・子供100円)
- トロリーリング●ピアカーテン
- イカ釣り●氷上スキー

営業時間

AM9:00 ~ PM11:00

送迎料

大人1,000円・子供500円(往復料金・乗船料別)

公営バス

宇検集港から送迎船で
わずか3分!

カラオケ無料
団体割引有り
(10人以上)

